# 魔法少女戦記リリカルなのはＩＦ

高町　由生

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

無印～Ａ’ｓまでは劇場版とサウンドステージを混ぜた話になります。

空白期はＢＯＡ＆ＧＯＤと劇場版を混ぜた話と管理局の改革話になります。

ＳＴＳは管理局の改革をした為にＴＶ版２６話をベースに完全オリジナル話になります。

ＶＩＶＩＤ～ＶＩＶＩＤ　ＳＴＲＩＫＥ！は母親フェイトでのヴィヴィオのオリジナル話になります。

魔法戦記リリカルなのはＦＯＲＣＥは原作が未完結の為原作コミック以下の展開はオリジナル展開になります。

この小説が受け入れられない人や苦手な人はブラウザバックを推奨します。

なのは無印でＩＮＮＯＣＥＮＴみたいにアリサとすずかが魔導士になります。

なのは無印は劇場版ベースにテスタロッサ家側メインの話になります。

高町家にオリジナル主人公（なのはのいとこ設定で魔力はなのはやフェイトより下で執務間（ＳＴＳ）とデバイスマネージャー（ＳＴＳのシャーリーやＡ’ｓのマリエル・アテンザ）両刀キャラ）が出てきます。

テスタロッサ家はプレシアとアリシア生存です。

八神家はアインスとツヴァイが両方生存します（アインスの救い方がちょっとチート）になります。
ＳＴＳではスカリエッティ側の戦闘機人と人造魔導士が味方（管理局の改革で最高評議会の脳みそ達を空白期で倒す為）で敵はオリジナルになります。
キャロの竜が原作のフリード以外はモンハンの２頭（１頭はフロンティアのトア・テスカトラともう１頭はジンオウガ）になります。
モンハンのアイテム（プレシア救出）やモンスターも訓練相手として使います。
闇の欠片事件でなのは、フェイト、はやてにとある変化がおこります。
ジュエルシードの総数が２１個から２８個になります（うち７個は海鳴に散らばったユーノが発掘した赤いジュエルシードでアリシア復活の鍵になります）。

# 目次

魔法少女リリカルなのは編
それは始まりの言葉なの ―― 1
それは厳しい訓練なの ―― 4
それは始まりの宝石なの ―― 9
それは不思議な出会いなの？ ―― 12
ライバル!?５人目の魔法使いなの ―― 17
ドキ！水着でプールで大ピンチなの？前編 ―― 23
ドキ！水着でプールで大ピンチなの？後編 ―― 27
ここは湯の町、海鳴温泉なの ―― 33
それは大切な願いなの？ ―― 37
風の向こうの記憶なの前編 ―― 41
風の向こうの記憶なの後編 ―― 53
ジュエルシードの自然の驚異なの ―― 63
砂竜のボスからジュエルシードを捕獲せよなの ―― 68
ジュエルシード発動そして次元震の驚異なの ―― 72
それは初めての共闘なの ―― 77
遂に出現その名は時空管理局なの ―― 84
それは火の鳥、強大な竜種なの ―― 89
寒空の中の決闘なの ―― 95
ジュエルシード氷山の一角そして飛竜種の登場なの ―― 102
死闘海鳴市、火山での激闘なの ―― 108
最終決戦海の上での共闘なの ―― 114

# 魔法少女リリカルなのは編
# それは始まりの言葉なの

これはまだ俺がフェイトと出会う前の物語、時空管理局の名も知らない小学3年生だった頃の物語。

ＳＩＤＥプレシア

「なぜ！なぜなの!!、アリシアの記憶転写は上手く行った。なのになぜ！、どうしてアリシアと利き腕も違うし、あの娘はアリシアじゃない。あの娘の名前はそうねフェイトとでもしておこうかしら？」

「あなたの名前は今日からフェイトよ！、魔法の先生はリニスにお願いするつもりだから頑張りなさいフェイト。」

「はい母さん！。リニスって人はまだ会ってないから知らないけど、あとで会えるんだよね母さん。」

「あとでちゃんと紹介するわフェイト。さぁ訓練室で待ってなさいフェイト。」

「はい母さん。」

「リニスはいるかしら？リニス。」

「なんですかプレシア？」

「今日から暫くの間私の娘のフェイトに魔法を教えて頂戴リニス。教え終わったらどこへなりとも消えなさい！」

「プレシア研究はやはり・・・・・・。分かりましたプレシア。では、これから訓練室に向かいますねフェイトはそこでしょう？プレシア」

「ええそうよリニス研究は上手く行かなかったわリニス。フェイトは訓練室だから宜しくね。」

「分かりました、プレシア。では失礼しますね。」

「あなたがリニス？宜しく・・・お願い・・・します。」

「はい宜しくですよフェイト。頑張ればプレシアあなたのお母さんの役に立てますからね～。」

「うん！私頑張るよリニス。」

「では訓練初日と言う事で今日は座学からやりましょうか？フェイ

ト」
ＳＩＤＥなのは
「ねぇお兄ちゃん、今日から家でお世話になる私の親戚って男の子だったっけ？。凄い楽しみだなぁ～来るの。」
「嬉しそうだな～なのは！。今日来る従兄弟は男の子で間違いないぞ。父さんの剣術の弟子だしな」
「お父さんの剣術って確か・・・・・・、そっかそれじゃあちょっと怖い子なのかな？お兄ちゃん」
「いや基本的にはなのはと同じでとても優しい子だぞ～。まぁ剣術やってる時はちょっと怖いかもしれないが・・・・・・。まぁ見てみるのが１番だぞなのは。」
「う～ん？早く来ないかな～その子。ねぇお父さん～その子って特別な力とかないよね？お父さんみたいに怪我したりとかしないよね？。」
「父さんみたいな怪我はそうそうしないと思うが・・・・・・、まぁ剣術タコくらいはできるかもしれないな。」
「う～ん色々心配になるな～なのはとしては。剣術もほどほどにしてほしいなぁ～。お父さんみたいに大けがされても困るし・・・・・。」
「暫くは父さんが入院してるし俺があの子の剣術修行を面倒見る事になるけどななのは。まぁ父さんが退院するまでは仕方ないな。」
「仲良くできるといいなぁ～その子と。同い歳くらいだよねなのはと。」
「ああなのはと同じ歳くらいだぞ～なのは。仲良くしてやってくれなのは。」
ＳＩＤＥ由生
「今日からお世話になる高町家って確か士郎さんが今入院中だったよな？俺も１回見舞いに行った方が良いんだろうか？。」
「まぁもうそろそろ着くから全ては着いてからでいいか、士郎さんの事は心配だけどな俺としても。」
「そう言えば次女だったっけ？なのはちゃんって。士郎さんが入院して元気失くしてないと良いけどなぁ～。俺とも仲良くしてくれる

かちょっと疑問だし・・・・・・。」
「由生君～家に着いたわよ～荷物降ろしましょうか？私も手伝うから。」
「あっ！すみません桃子さん。手伝いお願いします。剣術修行用の竹刀とかもありますから荷物に。」
「じゃあなのはと恭弥も呼んでくるわね２人だけじゃ荷物多すぎるし。」
「お願いします桃子さん。それと今日から宜しくお願いします。」
「はい由生君宜しくね～、じゃあ恭弥となのは呼んでくるわね。」
こうして俺の高町家での生活が始まった。

# それは厳しい訓練なの

ＳＩＤＥフェイト

「さて、フェイトの魔力変換資質雷とフェイト自身の魔法の使い方は覚えましたね？では今日から訓練を始めようと思います。」

「訓練？いったい私は何をすれば良いの？リニス。」

「そうですね～今日は訓練初日ですし、まずは初級としてイャンクック通称クック先生から始めてみましょうかフェイト。」

「クック先生？それを倒せばいいのリニス。そのクック先生はどこにいるの？リニス。」

「さて、それではクック先生のいる場所まで次元転移しますからねフェイト。ああそうそうクック先生との戦いはフェイト１人です。私はお手伝いしませんからねフェイト。」

「えっ!?私１人で戦うの？クック先生と。まだ魔法覚えたばかりなのに・・・・・・私１人で出来るかな？リニス。」

「大丈夫ですよフェイト動きをちゃんと見れば回避は出来るでしょうし、フェイトのスピードなら当たらなければ致命傷にはなりません。ああそうそう一応ダメージ受けた時の為に回復薬を１０個渡しておきますね。あとフィールドでの採取を忘れないようにしてくださいフィールドにはフェイトの役に立つアイテム等もありますので。」

「ありがとうリニス。フィールドの素材によってデバイスの強度が決まるんだよね？今後作る私専用の。フィールドもくまなく探してみるよ。私のデバイスともなるべく早く会いたいしね。」

「フェイトも頑張ってくださいね。あと回復薬等は調合によっても作れるのでフィールドで薬草を見つけたら調合してみてください。では訓練を始めましょうフェイト。初めてなので制限時間は５０分イャンクック１頭の討伐が目的です。」

「制限時間５０分でイャンクック１頭の討伐だねリニス。でこのナイフは何？リニス。」

「倒したらそのナイフで素材を剥ぎ取ってくるんですよフェイト。

ナイフは訓練には必要不可欠になりますからねフェイト。」
「解ったリニス。じゃあ次元転移も終わったみたいだしフィールドに行ってくるねリニス。ナイフと時計は持ったしカバンには回復薬も持ったし準備完了だね。じゃあまたあとでねリニス。」
「頑張ってきてくださいねフェイト。終わったら食事にしましょう。」
「うん！じゃあ行ってきますリニス。まずはこのマップ通りならベースキャンプって所まで行ってみようかな？」
「ここがベースキャンプ、それじゃマップ通りならまずは1の方に行ってみようかな？っとその前に支給品ＢＯＸからアイテム貰わなきゃ。入っているアイテムは支給品の応急薬に携帯食料にガンナーの為の弾薬類か応急薬と携帯食料だけ持ってくかな？。さてそれじゃあマップ1に移動だね。」
「ん～クック先生の姿は無しと。鉱石もあるしツルハシもベースキャンプにあったから掘っておこうかな。へぇ～掘れたのは鉄鉱石2個とマカライト鉱石1個か～まぁまぁだねじゃあ引き続きクック先生を探しに行こうかな？次は2と3で別れてるのか～3に行ってみようかな。」
「あの特徴のあるトサカ頭は・・・・・あれがクック先生かな？見つけた。じゃあ戦闘開始っと。まずは様子見かなランサーセットファイア。」
「クケェェェェェェェェェ。クケッ！クケッ！クケッ！」
「おっと嘴で突いてきたか。じゃあこのまま魔法使っていくかな？次はこれでどうかな？サンダー・スマッシャー」
「クケェェェェェェェェェ。クェ！クェ！クェ！」
「今度は炎を吐いてきたか。じゃあこれでどうかな？サンダー・レイジ！。」
「グゲェェェェェェェェェ。クケェ！クケェ！クケェ！。」
「あっ！逃げた。追いかけなくちゃ。その前にこのエリアの採取とかしなくちゃ。採掘完了。逃げたエリアは確か5だったよね。」
「クェ！クェ！クェ！。」

「また炎吐いてきたか。ランサーファイア。」
「クケエエエエエエエ。クケエ!クケエ!クケエ!」
「ん～しぶといなぁ～撃ち抜け轟雷サンダー・スマッシャー。これで倒せると良いんだけど・・・・・・。」
「クッケエエエエエエエ。クエ!クエ!クエ!。」
「まだ倒れないのか～。じゃあランサーセットフルオートファイア。」

「クッ　　ケエエエエエエエエエエエエエエ。クエエエエエエエエエエ。」
「やっと倒れてくれたか。初めてだったし結構ダメージ受けちゃったなぁ～あっリニスに貰った回復薬使おうっと。ん～時間は２０分経過か。この辺りの採掘だけしておこうっとクック先生と一緒に。」
「採掘完了。じゃあフィールドを離れてリニスの元に戻ろうかな?。リニス～倒してきたよ～２０分くらいかかってダメージも結構受けちゃった方だけど。」」
「お疲れさまでしたフェイト。じゃあ今日の訓練は終わりで戻りましょうか。明日からはまたクック先生との戦いが待っていますよ。」
「次からはもう少し被弾を減らす事が課題ですねフェイト。相手が魔導士の場合ダメージがもっとでかくて行動不能にされちゃいますよフェイト。」
「うんリニス私もっと頑張るね。」
「お疲れさまでしたフェイト。明日からはまた頑張りましょうね。今日はゆっくりとお休みくださいフェイト。」
ＳＩＤＥ由生
「さて由生君明日から学校に通ってもらう事になるけど聖祥大付属小学校で良いのよね?」
「はい構いませんよなのはとは別クラスでもいいです。学年は同じですし。」
「あっやっぱりなのはと同じ学年だったのね。少し大人びているから上かと思っちゃった。」
「じゃあ桃子さん明日からの学校生活も宜しくお願いしますね。な

のはももし同じクラスなら明日から宜しくな。」
「うんっ！うんっ！宜しくね由生君。同じクラスになれると良いなぁ～。アリサちゃんやすずかちゃんにも紹介したいし。」
「俺は明日が楽しみ過ぎて眠れるかどうか分らなくなってきたよなのは。明日が楽しみだ俺は。じゃあ俺は自分の部屋に行くななのは、桃子さん。じゃあまた明日。」
「うんお休みなさい由生君。」
「お休み～由生君。」
そして翌日の朝
「おはようございますなのは、桃子さん。」
「おはよう由生君。」
「おはよっ由生君。」
「今日から学校だけどなのはも由生君も準備しなさい。一緒に学校に行く事になるから。」
「じゃあ一緒に行こう由生君。バスの中でアリサちゃんとすずかちゃんに紹介するね。」
「あ！ああ。じゃあ準備してくるからまたあとでねなのは。」
「うん！じゃあ準備の前に朝ご飯食べちゃおう由生君。」
「ああそうだったなまずは朝ご飯かじゃあ頂きます。」
「ご馳走様でした桃子さん。じゃあなのは準備してくる。」
「ご馳走様お母さん。じゃあなのはも学校の準備してこようっと。」
「「じゃあ行ってきますお母さん（桃子さん）」」
「行ってらっしゃい2人とも。気を付けてね。」
「はーいお母さん」
「はい桃子さん。」
「由生君ここからバスに乗るから待ってれば来るからね。」
「ああじゃあ待ってようかな。」
「あっ！バスが来たよ。乗ろう由生君。」
「あっ！待てよなのは。」
「あっなのはちゃんこっちこっち。」
「なのは～こっちよ～って誰よ隣の子は。」

「なのはの従兄弟の高町　由生君だよアリサちゃんにすずかちゃん。」
「なのはの従兄弟の高町　由生ですアリサさんにすずかさん。宜しくお願いします。」
「アリサ・バニングスよ。アリサで良いわ由生。」
「月村すずかです。すずかで良いよ由生君。」
「じゃあアリサにすずか改めて宜しくな。」
「それでなのはちゃんなんで由生君がここにいるの?。」
「今日からなのはの同級生として学校に通う事になったのアリサちゃん、すずかちゃん。」
「なのはの同級生って事はあたし達とも同級生か。ならこれから宜しくね由生。」
「ああ宜しくなアリサ。」
そしてバスは学校につき朝のＨＲ
「さて、皆さんこんな時期ですが今日から一緒に皆さんと勉強する事になった新しいお友達を紹介します。入ってきてください。」
「今日からここで一緒に勉強する事になった高町　由生です。皆さん宜しくお願いします。」
こうして俺もなのはと同じ聖祥大付属小学校に通う事になった。

# それは始まりの宝石なの

ＳＩＤＥ由生

聖祥大付属小学校での休み時間

「ねぇねぇ由生君って住まいはどこなの？」

「なぁ高町とはどういう関係なんだ!?」

「海鳴市に来る前はどこに住んでいたの？」

「好みのタイプはいるの？」

「あ・あの・・・・・・。」

「はいはい由生が困っているから１人ずつ質問する事。皆良いわね。」

「じゃあまずあたしから由生君ってどこに住んでいるの？。」

「住まいはなのはの家に居候しているよ俺。」

「じゃあ次は俺。高町とはどういう関係？同じ苗字だけど」

「なのはとは従兄弟同士だよ俺。」

「じゃあ次あたしね。海鳴市に来る前はどこに住んでいたの？」

「海鳴市に来る前か～。ん～と確か関東の杉並区だよ」

「じゃあ次はあたし。由生君の好みのタイプって誰？。」

「俺の好みのタイプはそうだね～見た目が可愛くて、性格は大人しくて、髪の色が金髪で、目の色が赤眼の人が好みかな～。」

その頃管理局では・・・・・・・

ＳＩＤＥユーノ

「ユーノ・スクライアさんにシャーク・スクライアさんにアイリ・スクライアさん３名とも第７９管理外世界にロストロギアの発掘という事でよろしいでしょうか？。」

「はい（ああ（うん））それが目的です。発掘した物はおそらくロストロギアなので管理局で厳重封印してもらう必要がありますが・・・・・・。」

「それぞれデバイスはお持ちですか？デバイスがない場合はロストロギア発掘の許可は出せないですが・・・・・・。」

「ボルグレインとフレイムディッシュとスノートライデントがあり

ます。起動はちょっと上手く行ってないですけど・・・・・・待機状態でも魔法は使えます。」
「了解しましたデバイスがあるなら問題ないです。では良い旅を。無事をお祈りしております。」
「ありがとうございます。シャーク。アイリ受付終わったよ～次の航行便で出発しよう。」
「了解だよユーノ兄さん(了解ですユーノ兄さん)。さて荷物も準備ＯＫだしデバイスも準備ＯＫ。ああどんなロストロギアに出会えるのか楽しみだなぁ～。」
「私(わたくし)の方も準備完了ですわユーノ兄さん。どんなロストロギアが存在するのでしょうね第７９管理外世界には。」
第７９管理外世界行き航行便間もなく発車いたします。お乗りの方は１番ゲートまでお急ぎください
「おっと搭乗時間みたいだし行くよシャーク、アイリ。」
そして第７９管理外世界
「場所としてはだいたいこの辺りなんだけど、何か反応ない？シャーク、アイリ。」
「ロストロギア反応の他にはデバイスの反応が２つだけありますね。うち１つはベルカの魔力反応になりますユーノ兄さん。」
「ベルカの魔力反応？なんだろうそれっていったい。その場所を掘ってみようシャーク、アイリ。」
「あいよユーノ兄さん。」
「はいユーノ兄さん。」
「なんだろうこれ鎖で厳重封印された１冊の本？それと赤い宝玉？両方デバイスなのかな？それと宝石？魔力を持った宝石？でもなんで赤が７個に青が２１個あるんだろう？。」
「確かこの宝石はジュエルシードだぜユーノ兄さん。赤い方もジュエルシードなんだろうけど・・・・・・とにかく厳重封印して管理局の艦船呼んで運んで貰わないとユーノ兄さん。」
「うんそうだねシャーク。あとはこの白銀の本と赤い宝玉だけど持って行くしかないね管理局で調べて貰わないと。白銀の本の方は

前にスクライア一族の文献で見た闇の書ってのに似てるけど・・・・・・って本が消えた？いったいどこに行ったんだろう」
「ユーノ兄さんとにかく管理局に連絡しませんと。封印処理は私(わたくし)の方でしておきますので。」
「あっうん解ったよアイリ。封印処理はお願いねアイリ。」
「この赤い宝玉はユーノ兄さんが持っててくれ。」
「うんシャークその赤い宝玉を渡してくれ。管理局には連絡したし航行船はすぐに来ると思う。」
「ユーノ・スクライアさんですね。管理局航行船の物ですそのアタッシュケースの中身２８個は私達が責任を持って管理局までお届けします。」
「あっ！はいお願いします。中身はジュエルシード２８個です。」
その頃時の庭園では。
ＳＩＤＥプレシア
「フフフフフフフフ見つけたついに見つけたわよアリシア復活の糧になるかもしれないロストロギアを。管理局までは航行船を使ってもかなり時間かかるし次元魔法でちょっとちょっかい出しましょうか。」
「なぜ個数が２８個で赤が７個なのかはわからないけど青い方２１個だけでもアリシアを蘇らせる事が出来るはず。はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
そしてジュエルシード２８個は第９７管理外世界地球の海鳴市に散らばった。
ＳＩＤＥユーノ
「えっ？僕達の頼んだ管理局の航行船が事故で爆発？じゃあジュエルシードはシャーク。」
「第９７管理外世界地球の海鳴市って所に落ちたみたいだユーノ兄さん。ジュエルシードが暴走しているかもしれないし僕達で回収しないと。」
「私(わたくし)もお手伝いしますわユーノ兄さん。さぁ参りましょう。」
そして第９７管理外世界で運命の出会いが始まった。

# それは不思議な出会いなの？

ＳＩＤＥユーノ

「あれがジュエルシード・・・なのか？あれを止めなくちゃ駄目だねシャーク、アイリ。回収の為にも戦うよ２人とも。」

「おうよユーノ兄さん。攻撃は俺に任せてくれ。防御はユーノ兄さん、封印はアイリお前がやるんだ。」

「はい私（わたくし）も兄さん達のお手伝いとしてサポートさせていただきます。シャーク兄さん攻撃はお任せいたしますわ。」

「私の名前はレイジングハートです。私を使ってくださいユーノ・スクライア。私にはアレを封印出来る機能があります。」

「赤い宝玉はインテリジェントデバイスだったのか・・・。うん！わかったレイジングハート君の力貸してもらうよ。」

「ただデバイスの起動にはあなた達では魔力不足ですので私はこの待機形態の状態で封印のみ担当させていただきます。」

「ボルグレインやフレイムディッシュやスノートライデントも満足に起動できないからおそらくそうだと思ってたけど、やっぱり面と向かって言われるとキツイね。」

「シャーク攻撃魔法を頼むよ。僕は皆を防御する。アイリはレイジングハートで封印を。」

「よっしゃ～行くぜフレイムディッシュ。フレイムシューター、続けてフレイムアロー。」

「ガァァァァァァァァァァァァ！グオオオオオオオオオオオオオン。」

「プロテクション！。クッ攻撃が重いうわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ。」

「ユーノ兄さんうわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ。」

「ユーノ兄さん、シャーク兄さんきゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

「グオオオオオオオオオオオオオン。」

「封印なる獣よ妙なる響きの中に返りなさい。レイジングハート封印を。」

「シーリング！」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ。」
「まずい！アイリ、プロテクション。」
「あっユーノ兄さん・・・・・。　私も魔力切れでもう・・・・・・。」
「ウォオオオオオオオオオオオン。」
「逃げられちゃった・・・・・・追いかけなくちゃ。　あっ僕も魔力がもう・・・・・・。」
「俺ももう魔力が・・・・・・。　ジュエルシード早く封印しないと・・・・・・。」
「「誰か僕（俺（私））達を助けて・・・・・・。」
ＳＩＤＥなのは
「なんだったんだろうあれは今朝は変な夢を見ちゃったな～。あとでアリサちゃんやすずかちゃんや由生君にも相談してみようっと。」
そして学校の昼休みになり
「ねぇアリサちゃん、すずかちゃん、由生君相談があるんだけど。」
「もしかしてなのはも?・」
「もしかしてなのはちゃんも?・」
「なのはお前もか?・」
「えっ?どう言う事私もって。まさか皆も?・」
「ああ、何かおかしな格好した３人の少年少女が何かの化け物と戦っていてそして・・・・・・。」
「あたしもそんな夢を見たのよ今朝。それで皆に相談したくってね。」
「私だけじゃなかったんだ・・・・・・。　それじゃあすずかちゃんも?。」
「うんなのはちゃん。私もそんな夢で目が覚めて・・・・・・。」
「ここにいる全員が同じ夢を見るとか普通じゃねぇな。まさかこれって予知夢とかじゃねぇだろうな?。」
「由生予知夢って何よ?。」
「アリサこれから起こる事を夢に見る事を予知夢。既に起きている事だったら予知夢ではないが全員が同じ夢を見るとか普通じゃない。」

「これは夢の場所に放課後行ってみるしかないね皆で。」
「ああそうだなすずか。放課後あの夢の場所に行ってみよう皆で。」
そして放課後海鳴市のとある公園で・・・・・・
「(誰か・・・助けて・・・)。」
「なのは達も今の頭に響くような声聞こえたのか?これは行ってみるしかないな。」
「何これ倒れているのは鼬?フェレット?どっちなのよ!に犬に猫?。」
「来て・・・くれたんだ・・・。」
「あっ!また気絶しちゃった。とにかく近くの動物病院に。」
「3匹とも怪我は大した事ないけど酷く衰弱してるし今日1日はこの病院で預かって明日以降飼い主を探した方が良いと思うんだ皆。」
「すいません先生では明日まで宜しくお願いします。」
「それで犬はアリサの家で猫はすずかの家で飼い主が居なかった場合飼えると思うけど、あの鼬?フェレット?みたいなのはどうする?とてもじゃないけどなのはの家で飼えるとは思えないけど・・・・・。」
「あのフェレットさん家で飼えるようにお父さんとお母さんを説得してみるよ由生君。」
「良いのか?なのは。あのフェレット多分雄だぞ。」
「男の子って事?由生君。それでも説得してみるよ。」
「わかったなのは。じゃあアリサにすずかまた明日動物病院でな。」
「ええあの子も気になるしまた明日ね由生。」
そして夜中の時まで進み
「(助けてください・・・危険がすぐそこまで。」
「なのは聞こえたか?あのフェレットの声だ。」
「うん聞こえた。多分アリサちゃんとすずかちゃんも聞こえてると思う。」
「こっそりと動物病院まで行こうなのは。」
「なのは、由生。」
「なのはちゃん、由生君。」
「アリサにすずかもやはり聞こえてたかあの声が。」

「うん（ええ）。それで気になって来てみたんだけど・・・・・・。」
「なにこれ？どういう状況よ中に入ったらめちゃくちゃって。」
「皆あそこ。」
「来てくれたんですね皆さん。。」
「それよりもあれは何？説明して。」
「あれはジュエルシードの暴走体。僕達の世界でいう化け物です。あれを封印して欲しいんですけど。」
「封印ってどうやるの？。」
「皆さんこれをそれぞれ。これはデバイスといってあれと戦う為の力になるものです。」
「皆さんそれを手にイメージしてください。自分の身を護る服と杖のイメージを。」
「とりあえずこれで。」
「「「スタンバイレディ、セットアップ。」」」
「凄い魔力だ４機とも起動の呪文なしで起動した。」
「ユーノ兄さんこれならいける。」
「そこの白い服の子は封印に専念を。他の３人はそれぞれ攻撃をお願いします。」
「まずは俺から行くぜなのは、アリサ、すずか。フローズン・ソード。」
「ガァァァァァァァァァァ。」
「次はあたしね。いけっフレイムウィップ。」
「ガァァァァァァァァァァ。」
「次は私ね。響けアイスシューター。」
「ガァァァァァァァァァァ。」
「あっ！逃げた。結構早いな。なのはって子封印出来る？。」
「大丈夫。リリカルマジカル。封印されるは忌まわしき獣ジュエルシード封印！。」
「グォォォォォォォォォォォン。」
「凄い一気に３個も封印するなんて。レイジングハートやボルグレイン等で触れてください。それで封印は完了です。」

「じゃあ今回は俺となのはとアリサで1個ずつ持っておこうそれでいいな2人とも。」
「うん。それでいいよ由生君。」
「ええいいわよ由生。」
「やばっ皆急いでここから離れよう。」
「えっ？なんで。」
「あの音が聞こえないのか？なのは」
「ウウゥ～ファンファンファンファン。」
「あっ！やばっ。ごめんなさ～い。」
「じゃあアリサちゃん、すずかちゃんまた明日学校でね。それと犬と猫は宜しくね」
「じゃあまた明日ねなのはちゃん。」
「じゃあまた明日ねなのは。」
「俺達もこっそり出てきたし帰ろうなのは。フェレットの事は説明すればわかってもらえるさきっと。」
「うんそれじゃあ帰ろうか由生君。」
その頃時の庭園では
ＳＩＤＥプレシア
「フェイトはいるかしら？フェイト～」
「なんですか母さん。」
「フェイト第９７管理外世界の地球という星に母さんの研究に必要なものが散らばってしまったの。２８個のジュエルシードを全て回収してきて頂戴。うち7個は赤いジュエルシードだけどそれはどうでもいいわ。青い２１個だけでも回収できれば母さんの研究は成功するから。」
「はい母さん必ず２１個は手に入れてきます。行こうアルフ。」
「くれぐれも母さんを失望させないで頂戴フェイト。」
「はい母さん。」
そして運命は静かに回り始める

# ライバル!?５人目の魔法使いなの

ＳＩＤＥフェイト

「ここが母さんの言ってた第９７管理外世界地球。ここに母さんの求めるジュエルシードがあるんだ。アルフ早速この辺りの住まいの検索お願い。貯金は母さんの口座からまだ使えるはず。」

「あいよフェイト。ここは日本の遠見市って所みたいだ。近場の物件だとあの高層マンションの最上階辺りが借りれるねぇ～。どうするんだい？フェイトあそこで良ければすぐにでも交渉してくるけど？。」

「あそこならいい場所だねアルフ。じゃあ早速だけどアルフは交渉をお願い。賃金は口座振り込みでね必ず。あとアルフはこの世界では大人ってのに変身してくれる？そうじゃないと子供だけだと借りれないみたいだから。」

「じゃあちょっと行ってくるねフェイト。すぐ終わるからそれまでここで待ってておくれ。あとプレシアに言われたジュエルシードを探索するのも良いかもねフェイトは。管理局が動いてからじゃ遅すぎるし・・・・・・。」

「じゃあちょっとサーチャーを設置して探してみるねアルフ。アルフはマンションの賃貸お願いね。バルディッシュ広域サーチお願いね。」

「ＹＥＳ　ＳＩＲ．」

「この近辺にジュエルシードがあると良いんだけど・・・・・・？。あれっ？これって魔力反応だねバルディッシュ。」

「この反応は魔力以外に炎熱の反応がありますサーフェイト。おそらく現地生物を取り込んだジュエルシードがモンスター化したかと思われます。」

「炎熱反応に現地生物を取り込んだ反応か～もしかしてリニスの特訓で相手したようなモンスター？バルディッシュ。あれに炎熱反応持ってたのがいたような・・・・・・だとしたら厄介極まりないんだけど・・・・・・。」

「もしかしたらこの反応炎王龍と炎妃龍かもしれませんね近くで２つの炎熱反応がありますから・・・・・・。」
「炎王龍と炎妃龍って正直同時に相手したくない組み合わせなんだけど・・・・・バルディッシュ。はぁぁぁぁぁぁぁ言っても仕方ないかバルディッシュに。アルフの方はまだ時間かかるみたいだし行こうかバルディッシュ。」
「ＧＥＴ　ＳＥＴ．」
「グルアアアアアアアアアア、ガアアアアアアアアアア。」
「本当に炎王龍と炎妃龍とはね・・・・・・。しかも１匹色違いだしもしかして赤いジュエルシードからの暴走体？。だとしたら厄介極まりない相手なんだけど・・・・・どうしようもないねこればかりは愚痴言っても。じゃあやろうかバルディッシュ。」
「ＰＨＯＴＯＮ　ＬＡＮＣＥＲ　ＦＵＬＬ　ＡＵＴＯ　ＦＩＲＥ．。」
「グルアアアアアアアアアア。グルアアアアアアアアアア。」
「やっぱり熱い。これは直撃したら火傷どころじゃすみそうもないねバルディッシュ。」
「大型の魔力反応２名接近中。管理局ではないと思いますが魔導士の可能性大。どうしますかサーフェイト。」
「魔導士が２名って確かこの世界に魔法は存在しないはず？いったい何者？。」
「あと５分くらいで到着しますサーフェイト。」
「それじゃあそれまで頑張ろうかバルディッシュ。」
「ＹＥＳ　ＳＩＲ．。」
そして時間は少し巻き戻り放課後の聖祥大付属小学校へと戻りＳＩＤＥなのは
「じゃあアリサちゃんにすずかちゃん今日は塾のお稽古頑張って。ジュエルシードが発動したら私と由生君の２人で何とかするから。」
「アリサとすずかは勉強頑張ってな。なのはと何かあればちゃちゃっと片付けてくるから。」
「なのはの事お願いね由生。いきましょすずか。」

「じゃあなのはちゃん、由生君また明日ね。」
「ああまた明日なアリサ、すずか。」
「ふーんジュエルシードは現地生物を取り込んでモンスター化する事もあるんだねユーノ君。」
「うんそう。ってこの反応なのは、由生。」
「どうやらジュエルシードが2個現地生物を取り込んで発動したみたいだな。場所は海鳴市と遠見市の中間場所かここからなら近いし先行するよユーノ。」
「僕も急いで現場に向かうねなのは、由生。」
「レイジングハート「ボルグレイン」お願いな」
「「SET UP。」」
「じゃあ空を飛んで行くとするかなのは。」
「うん！由生君。」
「あれは？誰かがジュエルシードモンスターと戦ってる？ってうぇぇぇぇぇぇぇぇぇあれ炎王龍と炎妃龍じゃねぇか。なんだってあの2匹なんだよモンスター化してるのが。」
「由生君・・・・・・あれを知ってるの？。」
「モンスター〇ンターってゲームに出てくるとても強い古龍種って龍(どらごん)の1頭だよあいつらは。頭が弱点なんだが炎鎧ってので弱点部分を守っているんだ。だからそれ以上の火力で炎鎧を抜いて攻撃しないとならないいんだが・・・・・・幸い俺のボルグレインが弱点属性だから問題はないいんだが・・・・・・。あの娘1人じゃ2頭相手は苦労するだろうなおそらく。俺達も加勢するぞなのは。」
「うんじゃあ行くよでぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇい。」
「って 言っ た 傍 から 突 撃 し て く の か よ な の は。はぁぁぁぁぁぁぁぁしょうがないな。ボルグレインソードモード。」
「ソードモード。」
「ボルグレインフリーズ・スラッシュ。」
「グルァァァァァァァァァァァァァァァァァ。ガァァァァァァァァァァァァァァ。」
「そこのきみ、だ・い・じょ・う・ぶ・だ・っ・た？（すげぇ好みだ

この娘)。」
「由生君何で顔赤くしてるの?。って金髪に赤眼って由生君が話してた好みのタイプそっくり。」
「大丈夫だよ由生って人。それよりまずはこのモンスター達を封印しないと。」
「そうだった全ては封印してからだったな。ボルグレインもう1回スラッシュ。」
「レイジングハートバスターを。」
「バルディッシュランサーセット。」
「グルァアアアアアアアア。ガァアアアアアアアアアアア。」
「2人は封印出来るんだよな?これを。」
「うん出来るよ由生君。」
「はいできます。」
「じゃあボルグレインもう1発スラッシュ。」
「グルァアアアアアアア。ガァアアアアアアアアアア。」
「今だよってうわぁぁぁぁぁぁぁ炎が熱い。」
「「封印されるは忌まわしき器ジュエルシード封印。」」
「グルァアアアアアアアア。ガァアアアアアアアアアア。。」
「封印は何とか終わったかあちち少し火傷したわなのは。」
「大丈夫?由生君。」
「あのもしよければこれ使ってください。」
「んっ?火傷治しじゃないかこれなんで君が持ってるの?これを。」
「私訓練でああいうの相手に訓練してたから常備だけはしてるのアイテムの。」
「それはとても助かるわ君じゃやおかしいな名前は。」
「あっフェイトです。フェイト・テスタロッサ。」
「フェイトちゃんか助かるよ。それでフェイトちゃんもやはりジュエルシードが狙い?だとしたらお互い譲れないし戦わないとならないはずなんだけど。」
「私はそっちの赤いジュエルシードはいらないから青いのだけを回収したいんだけど・・・・・・。」

「じゃあ赤いのは俺が、青いのはフェイトにやるって事で良いかな？なのは。」
「うんそれで私は構わないよ由生君。」
「あとフェイト出来れば俺はフェイトに惚れたっぽいんで次回からフェイト側でお手伝いしたいんだけど良いかな？。」
「あっ・えっ・わ・・・私に惚れたって私が可愛いって事？由生。」
「ああそう言う事だフェイト。もっとも一緒に住むって事は出来ないけどなまだ年齢的に。」
「じゃあまたなフェイト。今度戦場で会った時はおそらくなのは側は3人の魔導士になってるはずだから気をつけてな。」
「じゃあまたね由生。今度からは手伝って貰うからねジュエルシード集めを。」
「ああじゃあまたなフェイト。」
「由生君フェイトちゃんに惚れたって本当でしょ？まだ顔が赤いし。」
「べ・別にいいだろなのはには関係ないんだから。」
「へぇ～そんな事言うのはこの口かな？由生君。」
「すみませんでしたなのは様。」
「へっ？なのは様って由生君・・・・・・。」
「じゃあ帰ろうぜなのは。」
「う・うん。」
そして再びフェイトサイドでは
ＳＩＤＥフェイト
「お帰り～フェイト。賃貸の件片付いてるよ。住むには問題ないけど掃除だけはしないと。」
「私の方はジュエルシードを1個回収したよアルフ。赤いのは回収してないけどね。」
「プレシアの方でも赤いのはいらないって言ってたし順調じゃないかフェイト流石あたしのご主人様だね。」
「次回からは私と同い歳の男の子が手伝ってくれる事になったからねアルフ。」

「ふーんそっかフェイトと同い歳の男の子か～そいつはあたしも楽出来て良いね。会うのが楽しみだよ。」
「なんか私が可愛いから惚れたとか言ってたけど・・・・・・。」
「な・なんだって～。まぁ確かにフェイトは可愛いから惚れるのはわかるけど・・・・・・。そいつって魔導士かい？。」
「うん管理局の魔導士じゃないと思うけど魔導士なのは間違いないねアルフ。まぁ喧嘩だけはしないでねアルフ。」
「フェイトがそう言うなら喧嘩だけはしないよフェイト。まぁ頼りになると良いんだけどねあたしとしては。」
「あれで特訓すればすぐにでも私と同じで強くなると思うよアルフ。まぁ訓練スペースがないから厳しいかもしれないけどねこっちじゃ。」
「あれなら確かに強くなるね。まぁこっちじゃ使える場所なさそうだけど・・・・・・。」
「じゃあ今日は疲れたからおやすみなさいアルフ。」
「あいよおやすみ～フェイト。」
こうして夜は更けていった。

# ドキ！水着でプールで大ピンチなの？前編

ＳＩＤＥなのは

「そう集中して心の中にイメージをするんだなのは。そのイメージを手にした杖にレイジングハートに渡して。」

「イメージを魔力に、リリカルマジカル捕獲魔法発動。って成功した？ユーノ君。」

「いや！成功してない。うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ。」

「アリサ、イメージを魔力にフレイムディッシュにそのイメージを送り込むようにして。そのまま空を飛ぶイメージを。」

「人間そう簡単に空を飛べるようになるなら苦労しないわよシャーク。イメージしたって空を飛べるわけないでしょ～！。」

「すずかそのまま対象を防御するイメージを杖に。どんなに遠くにいる人も守れるようになるイメージを。」

「ん～難しいよアイリ。人と離れた状態で防御魔法の展開がこんなに難しいなんて思わなかったよ～。」

「３人とも攻撃や防御魔法は基礎をきちんと覚えたしその延長線上なんだけどなぁ～。難しい技術はないんだけどねぇ～。なのはは今は捕縛魔法、アリサは飛行魔法、すずかは遠くへの防御魔法展開。まぁそれなりに技術は必要になるんだけどね。」

「それよりなのは、すずか今日の約束忘れてないでしょうね？。」

「あのバス停近くに新しく出来たっていうプールの約束でしょアリサちゃん？。」

「アリサちゃんちゃんと覚えてるよ。今日の放課後が楽しみだね。あっ勿論ユーノ君とシャーク君とアイリちゃんも一緒に来るんだよ。」

「えっ！僕達もなのは。どうするシャークにアイリ。」

「まぁプールくらいなら息抜きにいいんじゃないか？ユーノ兄さん。ここの所ジュエルシード探しに忙しかったしな。」

「プールならいいんじゃないでしょうか？ユーノ兄さん。私達（わたくしたち）にも休息は必要ですし・・・・・・。」

「ところで由生はどうするの？なのは。流石に誘わないってのはかわいそうだし。」
「ん～由生君も誘ったんだけどねぇ～、もう1人の魔法少女の彼女が気になるみたいでそっちに同行するって言ってた。」
「金髪赤眼のフェイトって言ってたっけなのは。そっちに協力してるって事？由生は。」
「うん惚れちゃったみたいでそっちに協力するって言ってた由生君は。なのは達にも協力して欲しいんだけどねぇ～。」
「惚れたねぇ～由生君結構優しいところあるからねぇ～。そのフェイトちゃんに何か感じる部分があったんだろうねぇ～。」
「そうだと思うけどあれは一目惚れだったよ～すずかちゃん。一目惚れであそこまで協力するって事はそうそうないと思うんだよねぇ～。」
「一目惚れか～それはしょうがないねなのはちゃん。それにしても何が一目惚れの原因なんだろう？好みのタイプだけって事はないよね？なのはちゃん。」
「多分好みのタイプだけって事はないと思うのすずかちゃん。多分自分に対しての何かがあるから協力してるんだと思うの。」
「じゃあなのは達も今日の訓練はここまででそろそろ学校の時間だよ皆。放課後の訓練は今日はプールだからなしだけどね。」
「今日の放課後は本当に楽しみなのユーノ君。由生君がいないのは少し残念だけどね。」
そして時間は放課後まで進み
「さて土日は半日授業だから楽でいいよねぇ～アリサちゃん、すずかちゃん。」
「そうねなのは、由生はこれからフェイトって人の所？」
「ああそうだぜアリサ。俺は暫くはあっち側でのジュエルシード集めになるからな。くれぐれも邪魔だけはするんじゃねぇぞと釘だけは刺しておくからな。邪魔するんなら戦ってでもぶっ叩くからなお前らを。」
「ふーんいい度胸じゃない由生。それならあたし達の邪魔するんな

ら由生でもぶっ叩くからね。どっちがジュエルシードを集められるか勝負しようじゃない。」
「面白ぇじゃねぇかアリサ。良いぜその勝負受けてやるよ。ただし赤いジュエルシードは俺が貰うからな。」
「赤いジュエルシードは確か暴走体も強力だったかしら。弱点さえつければ大丈夫そうだしあたしの弱点が出てきたらあたしが倒しちゃうからね。そうなっても恨まないでよね。」
「ほぉぉぉぉぉ随分強気に出たなアリサ。まぁその方がアリサらしいけどな。でもあのモンスター達の弱点はバラバラだからな前回は偶然俺が得意な属性だったけどななのは。」
「もし赤いジュエルシードがあったらそっちに連絡するね由生君。それに関してはお互い協力するって事にした方が良いと思うの!。怪我してからじゃ遅いし。」
「それもそうだなじゃあ赤いジュエルシードに関してはお互い協力するって事でいこう。アリサ達にもこれ渡しておくな。これでたいていのモンスターはわかるから。」
「うんありがとう由生。でもこれに載ってないモンスターがでてきたらどうするの?。由生。」
「う~んたいていのシリーズモンスターならそれに載ってるからな俺が書き込んだしな実際問題。新種に関しては俺にも分らん。出てきたらその時対処だな。」
「わかった由生君。これ大事に使わせてもらうよ。とりあえずそっちも頑張ってねジュエルシード集め。」
「ああじゃあまた来週なアリサ、すずか、なのは。土日はあっちに泊まり込みで訓練漬けの毎日だよ俺はな。」
「じゃあ特訓頑張ってね由生君。なのは達は約束通りこれからプールだから。あと由生君もたまにはフェイトちゃん誘ってプールとか行った方がいいよ。これはなのはからの忠告。」
「じゃあ今度誘ってみるわなのは。今日は訓練だからどうしようもないけどな。」
「別に今日でも良いんだよ由生君。ちょっと念話で聞いてみてよ。」

【フェイトちょっといいか？今日の予定なんだけどな一緒にプールでも行かないか？】
【プールくらいなら今日でも良いけど急にどうしたの？由生。訓練に励んでたじゃない最近はこっちで。】
【なのは達がプールに誘えってうるさいからさ。それで聞いてみたんだが、水着っての持ってるか？フェイト。】
【水着ってのは持ってないけどバルディッシュに頼めばどんな格好でも出来るよ由生。】
【そうか、じゃあ今日バス停前に新しくできたっていうプールに集合なフェイト。なのは達も同じ場所だけど良いよな？別に。】
【うんじゃあまたあとでね由生。他に持って行くものは？】
【バルディッシュ忘れたら裸で泳ぐ事になるからバルディッシュ忘れるなよフェイト。それ以外はこの世界のお金が必要になるけどそれは俺が出すからフェイト。】
【じゃあバルディッシュだけ持って行けば大丈夫だね由生。それじゃあまたあとでね。】
【ああまたあとでなフェイト。】
「さて、フェイトもＯＫだって事になったし俺もお前らと一緒にプール行くわ。」
「じゃあ一緒に行って待ち合わせすればいいね由生君は。」
「ああそうなるなすずか。今日１日は宜しくな皆。」
後編へと続く

# ドキ！水着でプールで大ピンチなの？後編

ＳＩＤＥなのは

「アリサお嬢様、すずかお嬢様、なのはお嬢様お待ちしておりました。お迎えに上がりました。って由生様も一緒でしたか、今日はご一緒出来ないと聞かされておりましたので少し驚きです。」

「あっファリンさんご無沙汰してます。今日は一緒に行けるようになったのでご一緒させてもらってます。あとでもう1人合流予定ですが構わないですか？名前はフェイト・テスタロッサって言います。」

「フェイトお嬢様ですか・・・・・わかりました由生様。到着いたしましたらご紹介してくださいねその時はお世話いたしますので。」

「ファリンさん宜しくお願いしますね。【フェイト少し良いか？お前が着いたらアリサやすずかやすずかの家のメイドさん達やなのはの姉にお前を紹介する事になった。】。」

【紹介？私を。それは別に構わないけどなんて紹介するつもりなの？まさかジュエルシード集めを手伝ってるとか言わないよね由生。そんな事したら余計混乱させちゃうよそっちを。】

【その点は心配するな。訳あってある物の回収を手伝っているお嬢さんって事で紹介するから。まぁどこのお嬢さんって聞かれても困るけどな（笑）。】

【それなら問題ないね。あともう少しでそっちに到着するよ由生。着いたら手を振るから振り返してね。】

【ああわかったそれくらいなら問題ないさこっちもな。あと水着はファリンが用意してくれてるからそっちから選んでくれフェイト。】

【わかったよ由生。じゃあまずはファリンさんに挨拶かな私は。そのあとは由生に泳ぎを少し教えてもらうくらいかな？フフ。】

【まさか泳げないのか？フェイト。泳げないんだったら悪かったな誘ったりして。】

【泳げるよちゃんとリニスに泳ぎの基本は教わったし。ただ泳げると言っても戦闘しながら泳ぐ感じのが多かったからそれで・・・・・。】

【ああ例の戦闘訓練で泳ぎながらの戦闘訓練したって事か。じゃあ

普通に泳ぐだけってのは初めてって事か。じゃあ少し教えてあげるよ泳ぎ方を。】

【うんよろしくね由生。】「お～い由生～着いたよ～。」

「お～こっちだフェイト。ファリンさんこちらがある物探しを手伝っているフェイト・テスタロッサです。」

「フェイトお嬢様初めまして。月村家でメイドをしておりますファリン・K・エーアリヒカイトと申します。今日1日皆様のお世話をさせていただきます。なのはお嬢様、アリサお嬢様、すずかお嬢様が現在こちらの中で水着を選んでおりますのでフェイトお嬢様も水着をお選びください。」

「あっフェイトちゃんきたんだ。こっちで一緒に水着選ぼうよ～。」

「初めてなのでよろしくおねがいします。水着なんて初めて着るよ私。どれにしようかな～ってこれなんか私のバリアジャケットに似てて良いかも、由生も喜ぶかな?。(某RPGの危ない水着をイメージしてもらえればわかるかと。)」

「フェイトちゃんそれを着て喜ぶ人は一部の特殊な人だけなの。無理しないで良いからワンピース型から選んだ方が良いと思うよその方が由生君も喜ぶから。それにフェイトちゃんの体形じゃその水着を着たら色々と血の海が想像できるの(笑)。アリサちゃんとすずかちゃんにフェイトちゃんを紹介するからちょっと待っててね。アリサちゃ～ん、すずかちゃ～ん。こちらフェイト・テスタロッサちゃんなの。こちらアリサ・バニングスさんに月村すずかさん私の友達だよフェイトちゃん。」

「初めましてで良いのかな?アリサにすずか。紹介されましたフェイト・テスタロッサです。あなた達もジュエルシードを集めているんでしょ?だったら私や由生の邪魔はしないでね。」

「フェイトあなたもジュエルシードを?いったい何の為に・・・・・。あたしは水着これにしようっと。」

「フェイトちゃん理由(わけ)を教えて。そうじゃなきゃぶつかり合っても仕方ないと思うよ。なのははこれにしよう～水着。」

「フェイトちゃん私達に出来る事はないの?由生君の負担も軽くし

たいしフェイトちゃんとは戦いたくないよ。わたしはこれにしようかな水着。」
「理由(わけ)は教えられない残念だけどね。私は黒のこの水着にしようかな。由生喜んでくれるといいなぁ～。」
「ファリンさん水着は全員ＯＫです。じゃあフェイトちゃんは由生君と一緒に入ってね受付。」
「かしこまりましたなのはお嬢様。由生様も水着は準備出来たみたいなのでフェイト様は由生様と一緒に。」
「じゃあ行こうぜフェイト。料金は子供２人分でお願いします。」
「子供２人分で３６０円になります。」
「はい３６０円。じゃあ更衣室は別々だから更衣室でさっき選んだ水着に着替えてきてくれフェイト。」
「うんわかった。私はどっち行けばいいのかな？。」
「フェイトちゃんはなのは達と同じでこっち～。じゃああとでね由生君。」
「ああああとでななのは。フェイトの事は頼んだぜ。」
「じゃあ行こうか？フェイトちゃん。更衣室は広いんだよ～。」
そして時間は少し経過して
「お待たせ由生君ってアリサちゃんにお兄ちゃんもう着替え終わってたんだ。速いなぁ～。」
「美由紀あの事もあるし荷物はちゃんと見張ってろよ。」
「わかってるよ恭ちゃん。あたしに任せといて。」
「恭也さんあの事って？。」
「ああ先週ここで女性の荷物を盗む輩がいたんだよすずかちゃん。だから用心に越した事はないと思ってね。」
「女性の荷物をですか、それって痴漢ですか？恭也さん。だとしたら気持ち悪いです。」
「痴漢とはちょっと違うんだけど女性の荷物から服とかだけを盗む泥棒がいたって話でねすずかちゃん。」
【由生ちょっといい？ここにジュエルシードの反応があるよそれも赤いの１個に青いの１個。またモンスター化するといけないし探し

に行かない？由生。】
【赤いジュエルシードと青いジュエルシードがあるのかここに。なのは達にまだ赤いのは強すぎて厳しいし俺達で探しに行こうかフェイト。】
「恭也さんちょっと俺とフェイトで周辺の警戒に行ってきますね。荷物奪われたら厄介ですし、何より同じ男としてそういう輩は許せませんから。」
「あ～すまん由生。先週捕まっているんだその男は。でも念の為って事で美由紀には話したんだが・・・・・・。」
「それでも脱獄してたら厄介ですからやっぱり周辺警戒してきますフェイトと。」
「そこまで言うなら行ってこい由生。ただしフェイトちゃんを怪我させないようにな。」
【フェイト許可は出たし行こうぜ探しに。】
【うん行こうか由生。多分ボイラー室の方だと思うそこら辺からジュエルシードの反応がするから。】
そしてボイラー室周辺で
ＳＩＤＥフェイト
「なっ！こいつはナバルデウスじゃないかフェイト。フェイトの変換資質が弱点のモンスターだ。ボルグレインセットアップ。」
「ナバルデウス確か深海に生息してるモンスターだったよね？なんでこんな所にっていつの間にか部屋が深海になってる。バルディッシュ行くよ。」
「ＳＥＴ　ＵＰ・。」
「ＧＥＴ　ＳＥＴ・。」
「バルディッシュランサーセット。」
「ファイア。」
「ボルグレインランサーセット。」
「シュート。」
「ガ　ルァァァァァァァァァァァァァァァ。　グルオオオオオオオオオオオオオオ」

「深海だからか動きがぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ。」
「由生！バルディッシュサイズフォーム。アークセイバー。」
「ＡＲＣ　ＳＡＢＥＲ」
「バルディッシュデバイスフォーム。サンダースマッシャー。」
　「グ　　ルァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ、ガァァァァァァァァァァァァァァァァァァ。」
「ボルグレイン。シューターセット。ファイア。」
「グォォォォォォォォォォォォォン」
「今だフェイト。封印を。」
「忌まわしきはジュエルシード、許されざる物を封印の輪に。ジュエルシード封印。」
「ＳＥＡＬＩＮＧ。」
「やっぱり赤いジュエルシードかこっちは。俺が貰うなフェイト。ボルグレイン。」
「ＳＥＡＬＩＮＧＮｏ２３。」
「あとはなのは達の方に１つ気配を感じるなそっちは今回はなのは達にくれてやろうフェイト。」
「仕方ないね今回は赤いのの相手ができる事が判明したってだけで勉強になったよ。」
　その頃なのは達の方でも
　ＳＩＤＥなのは
「あ～もう犯人はジュエルシードに願ったのね女性の下着や衣服が欲しいってシャーク。」
「ああその結果がさっきの触手だ。しかしこいつはヤマツカミとか言ったか?なんでこんなのがジュエルシードの暴走体なんだよ。」
「弱点はすずかみたいねすずか攻撃よろしくね。あたしとなのはが援護するわ。」
「スノートライデント。フローズンバスター。」
「フレイムディッティシュ。フレイムスラッシュ。」
「レイジングハート。ディバインバスター。」
「グォォォォォォォォォォォォォォォォォ　　ン。」

ガァァァァァァァァァァァァァァァァァァ。　　　グルゥウウウウウウウウウウウウウウウウウ。

【なのはいくらやっても分裂しちゃうし一か所に纏めて封印しないと元の木阿弥だ。】

【それなら今日の早朝練習の応用編なの。レイジングハートお願い。】

「レストリストロック」

「忌まわしきはジュエルシード、許されざる物を封印の輪に」

「SEALINGNo17」

「今日はすずかちゃんだけ持ってなかったしすずかちゃん。」

「スノートライデント。」

「SEALINGNo17」

「これで皆1個ずつ持った事になるし次からは争奪戦だね。」

「次から複数出てきたら倒したものが入手するでいいわねすずか、なのは。」

「「文句なしだよアリサちゃん。」」

「由生達の方も終わったみたいだし今日はこれで解散だわ。」

そして舞台はまた少し時間が経過する

ここは湯の町、海鳴温泉なの

ＳＩＤＥフェイト

「ねぇ由生近くに温泉街があるんだけど、一緒に行かない？アルフと私と由生の３人だけで。」

「わ・わかったから耳元で囁くように言うなフェイト。って誰からそんな事教わった？まぁだいたい予想はつくけどな。」

「由生あんまり嬉しくなさそう。そんなに私の事嫌い？アルフがこうすれば由生が喜ぶって聞いたんだけど。」

「嬉しくない訳じゃないさフェイト。だた耳元で囁かれるとくすぐったいだけだ。それとア～ル～フあとで模擬戦な全力全壊で。フェイトにまだそんな事させるんじゃありません。」

「わかった・わかったから落ち着いて由生。それと壊の字が間違ってるように見えるんだけど気のせいだよね？由生。」

「いいや間違ってないよアルフ。これで正しいのさ俺の場合はな。だからあとできっちり全力全壊で模擬戦しような？アルフ。」

「うう～フェイトあたしまだ死にたくないよ～。由生顔は笑ってるけど心から笑ってないから怖いよ～フェイト。」

「由生あんまりアルフを怖がらせないでね。私の大事な使い魔なんだから。温泉行く時ってどんな姿が常識的だったっけ？由生。」

「温泉行く時は基本的には宿に備え付けの浴衣にスリッパだな確か。あとは部屋に備え付けのタオルとバスタオルを持って行くんだ。アルフ温泉が染みると良くないから模擬戦は今回は勘弁してやるよ。」

「ありがとう由生。あんまり由生をからかうような真似だけはしないようにするよあとが怖いしねあたしも。そう言えば気になってるんだけど浴衣の下は何も着けないのかい？」

「昔は浴衣って言ったら素肌の上に直接羽織る感じだったけど最近は浴衣の下は下着でもいいみたいだよアルフ。あとおそらくだけどなのはやアリサやすずかも温泉街には来ると思う毎回３家族合同で温泉街行ってるって言ってたからななのはが。だからおそらく今回

はジュエルシードは早い者勝ちになると思う。正直フェイトの方がまだ強いと思うけどな戦ったとしても。」
「温泉街近くで発動前のジュエルシード反応をキャッチしたから誘ってみたけどそうか彼女達もジュエルシード集めしてたねそう言えば。アルフもし彼女達に会ったら少し牽制入れといてくれる？ガブッと行くって感じで言っていいから。」
「わかったよフェイト。会えば牽制しとけばいいんだね。でもそれだと次に会った時からは彼女達と戦う事になるけどいいのかい？フェイト。由生もあんまり知り合いとは争うなって言ってたし。」
「彼女達とは遅かれ早かれジュエルシードを巡って争う事が決まっているんだアルフ。早いか遅いかの違いだけだよ正直な話な。」
「それなら別に気にしないけどせっかくフェイトに出来た友達かもしれない娘と戦うのはちょっとと思っただけでね由生。」
「ああ確かにそれは俺も思う所があるけどなアルフ。気にしてたって仕方ないんだ邪魔する奴はぶっ飛ばしてでも通らなきゃこっちの言い分は通用しないよアルフ。」
「確かに由生の言う通りか。分かったあたしも気にしないで戦うよフェイトの為に。」
そして温泉街出発当日の朝
「じゃあ行先までのお金は俺が出すからな車の運転は子供だけじゃ出来ないしアルフも免許証持ってないから運転できないしな。だから目的地までは電車を乗り継いでいくよフェイト、アルフ。
そして温泉街に到着したフェイト一行様はと言うと
「じゃあ俺は今から戦闘の舞台になる場所の下見に行ってくる。魔力撃ち込まなきゃジュエルシードだって暴走体は現れない訳だしな
「じゃあ私は部屋でのんびりしてるよ由生。何かあったら呼んでね。」
「じゃああたしは周りの散歩でもしてこようかね。その後はフェイト一緒に温泉行こう。」
「アルフが帰ってきたら私とアルフは温泉行ってるから念話お願いね由生。」

【ふ～んやっぱり来てたんだねおチビちゃん達。フェイトと由生の邪魔をしたらガブッていくからねガブッて。だから大人しくしてるんだよおチビちゃん達。】
【フェイトちゃんと由生君も来てるの？ここに。だったら会わせて話をさせてください。何もわからないままぶつかり合うのは嫌だ。】
【会わせる訳には行かないね～おチビちゃん。それとも今ここでバトルを始めるのかい？それでもこっちは構わないんだけどねぇ～。】
【わかったわよ！じゃあこっちが勝ったらそっちのジュエルシードを貰う。こっちが負けたら1人だけ手持ちのジュエルシードをあげる。これでどうかしら？そこのお姉さん。】
【威勢がいいねぇ～そこの金髪のおチビちゃん。いいよその条件のったよ。】
【じゃあまた夜にでも会いましょう。それまではお互い干渉しないって事で。】
【あいよそれじゃあまた夜にでもなおチビちゃん達。】
そして時間は夜になりジュエルシードが発動した。
「ジュエルシードが発動したぞフェイト、アルフ。手早く済ませるよあいつらも多分気配には気づいているだろうしな。」
そしてジュエルシードの封印を終えた直後
「やっぱりジュエルシードだったねアリサちゃん、すずかちゃん。ってもう終わってる。」
「やっぱり来たねなのは、アリサ、すずか。悪いけど母さんの研究の為にこのジュエルシードは渡せない。」
「私達だってユーノ君達のお手伝いの為にジュエルシードは渡せない。さて、誰ＶＳ誰かしら？戦うのは。」
「戦う相手はこの魔法で決めよう。」
「ふむ決まったね。戦うのは僕た高町由生と高町　なのはに決定された。」
「ボルグレイン「レイジングハート。」。」
「「ＳＥＴ　ＵＰ」」
「さて、先行はこっちが貰った。アイシクルファング。」

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ。今度はこっちの番だよレイジングハート。Divine buster。」
「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ。ボルグレインフリーズスラッシュ。」
「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ。レイジングハート。」
「OKディバイン・シューター。」
「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ。ボルグレインブリザード・シューター。」
「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ。私の負けだね由生君。」
「PUT　OUT。」
「由生私が貰うね。バルディッシュ。」
「SEALING。」
「PUT　IN」
こうして夜は更けていった。

# それは大切な願いなの？

ＳＩＤＥフェイト

「由生、あれはいったい何をしているの？お互いに丸い玉を追いかけてるけど？」

「あああれはサッカーって言ってな。あの白と黒の丸い玉を相手ゴールまで蹴っていってゴールポストの中に玉が入れば１点ってスポーツだな。ちょうど今試合してるチームの片方は翠屋Ｊ・Ｆ・Ｃと言ってなのはの父親が監督を務めているチームだな。あれが気になるのか？フェイト。」

「ううん由生あのゴールキーパーやってる男の子なんだけどさ、ジュエルシードを持ってるよ発動前のを。あれが人間の願いで発動する前に回収しないと厄介な事になるよ。」

「本当か？フェイト。アルフ念の為サーチしてみてくれ。もし本当だったら厄介な事この上ない。」

「ちょっと待ってな由生。サーチ結果だけどフェイトの言う通り持ってるね発動前の封印されてないジュエルシードを。あのおチビちゃん達に気づかれずに回収するのは難しいよ由生。どうする？今回は諦めるかい？。」

「なのは達に気づかれずに回収するのは難しいかアルフ。そうなったらぶつかり合うしかないから今回はスルーするしかないな。すまんなフェイトまだ４個しか集まってなくて。おっとそうだボルグレイン青いジュエルシードを１個プットアウトしてくれ。」

「ＰＵＴ　ＯＵＴ」

「フェイトこの青いのはフェイトが持っといた方が良い。俺は赤いのだけをボルグレインに貯め込んでいくから。」

「良いの？由生。私と会う前に回収したやつでしょ？由生が。赤い奴は確かに由生が持ってるって事で私も同意したけど本当に貰って良いの？。」

「ああ貰ってくれフェイト。その代わりフェイトがもし赤いのを回収したら俺が貰うって事で良いか？対価は。」

「赤いのって言ったら前に住まいで契約した時に由生とフェイトが回収してきた青い1個と赤い1個以外で住まいの近くで発動前の赤いのを1個見つけて封印したのをフェイトに渡した事あったよね？。あれと交換したら？フェイト。」
「あっ！あれだよねアルフ。バルディッシュ赤いのだけプットアウト。由生のと交換でこれだけ貰ってくれないかな？由生。」
「これでこっちの手持ちは青いの４個に赤いの３個か。アルフグッジョブだぜ。ボルグレインプットイン。」
「ＰＵＴ　ＩＮ」
「バルディッシュこっちもプットイン。」
「ＰＵＴ　ＩＮ」
「さて、それじゃああとはなのは達に任せるとして俺はなのはに念話送っておくぜ。」
【なのはちょっといいか来てもらって。すぐ近くでお前らの試合見てるからすぐわかる。】
【ほぇ？由生君どこ？って隣にいるのフェイトちゃんとあの時のお姉さん。アリサちゃん達に連絡してから行くね。】
ＳＩＤＥなのは
「アリサちゃん、すずかちゃんちょっとユーノ君お願い。なのはは由生君とお話ししてくる。」
「あっちょっとなのは！行っちゃったわね。近くに由生がいるみたいだけどどこだろう？。」
「それで由生君話って何？。大事な事なんだよね？。」
「お前らのチームのゴールキーパーの男の子ジュエルシードを1個持ってるぜ多分見に来てる彼女っぽい女の子にプレゼントするつもりだろうな。あの女の子の方を自然と気にしてたからな。なのは達の方で封印しておいてくれ。今回は俺達は身を引く。気づかれずに回収するのは難しいしな。」
「そんなあのキーパーの子が持ってるの？ジュエルシードを。でもどうしてそんな事に。」
「多分綺麗な宝石だなぁ～って事で拾ったんだろうなあの子。願い

事に反応してからじゃ遅いからなのは達で何とかして回収してくれ。じゃあ俺達はこれで失礼する。アリサやすずかに気づかれたくないしな。」
「わかった由生君。そう言う事ならなんとか回収してみるね失敗しちゃったらごめん。その時は手助けに来てくれる？由生君。」
「手助けは無理だな。これからフェイトと訓練するからな２人でシミュレーター使って。腕上げておかないと赤いのとは戦えないしな。」
「そっか由生君赤いの回収してたもんね確か。赤いの今何個くらいなの？残りは。」
「残りはあと５個くらいだな。それで赤いのは封印が終わる。青いのは現在６個だからあと１５個か。青いのが大変だが頑張ろうなのは。」
「赤いのがあと５個くらいって事はまだ２個くらいしか封印出来てないのなの。あと１５個大変だけど頑張る。じゃあまたね由生君。」
「お待たせアリサちゃん、すずかちゃん。キーパーの子ってどこ行ったの？。」
「キーパーの子ならあそこにいるけどどうしたの？なのはちゃん。説明してくれるよね？。」
「それがねあのキーパーの子ジュエルシード持ってるって由生君が。だから私達で回収しなくちゃなの。」
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁそれがマジならヤバいじゃないのなのは。何としても回収するわよなのは、すずか。」
「どこで拾ったのかわからないの？なのはちゃん。由生君から何か聞いてないの？。」
「由生君からは何も聞いてないなの。ただあの子がジュエルシードを持ってるって事だけで・・・・・・。」
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁしょうがないわねなのは。すずかポケット以外を１回凍らせられる？その隙に取ってくるからあたしが。」
「無理だよアリサちゃん。凍結範囲は空気中の人物含めて全部だから。ごめんね役に立てなくて。」

「ああもうどうしたらいいのよこの場合。」
「アリサちゃん隙を見て抜き取るしかないよなの。」
そんなこんなで翠屋での祝勝会が終わり解散となってしまった。
「結局隙なんかなかったわねなのは、すずか。」
「仕方ないなの。こうなったら事情を説明して。」
【それは駄目だよなのは。魔法文化がない以上秘匿しとかないと。】
【ごめんユーノ君。じゃあどうしたらいいの？。】
【発動するまで待つしかないねもう。】
そしてジュエルシードが発動して
「今回のって大きな樹なの。どこかにあの子達がいるから助けないとなの。」
【あの子達の居場所は見つけたけどこれだけ大きいとかなり近づかないと封印できないよなのは。】
【大丈夫なの。私は砲撃の才能があるってユーノ君言ってたのそれを試してみるの。】
【気を付けてねなのは。なのはが怪我でもしたら僕は。】
【大丈夫なのユーノ君。】「レイジングハート大きいので1発封印出来るよね。」
「オフコースマスター。あなたがそれを望むのなら。」
「お願いねレイジングハート。」
「ディバイン。」
「バスター。」
「グオオオオオオオオオオオオオオオン。」
【凄いあんな大型を1発封印してしまうなんて。なのはの魔力はどれだけ高いんだ。】
「ユーノ君お疲れ様～なのははちょっとお疲れモードなの。だから夕飯までお休み～。」
「ゆっくり眠ると良いよなのはお休み。しかし、なのはの魔力は日々強くなってきている。」
残りジュエルシード青１４個、赤４個で次回へ続く

# 風の向こうの記憶なの前編

ＳＩＤＥフェイト

「ねぇ由生聞いて欲しいの。これはまだ私の母さんが研究に没頭していた私が幼かった頃の事なんだけど、私と母さんが暮らす移動庭園はミッドチルダの山深い土地に停泊していたんだけど、その頃の私は1人きりで庭や山の中で戦闘訓練や魔法の練習していたんだ。その生活が寂しくなかったと言えば嘘になるけど、まだ暖かい思い出もいっぱいあったんだ。」

「おはようフェイト朝ですよ。」

「おはようリニス。」

「食事の用意ができてます、体調はどうですか？。」

「うん悪くないよリニス。」

「今日は外も暖かいので食事は外で取りましょうかフェイト。」

「うん。母さんは今日も研究室？。」

「ええそうですよフェイト。」

「ミッドの中央で次元航行エネルギーの技術開発に携わっていた母さん。偶然の事故がきかっけで仕事を離れる事になり、それからはどこにも属さずに放浪の旅をしながら2年？、3年？ともかく優しかった母さんは変わってしまった。全然笑わなくなって研究以外には見向きもしなくなってたった1人の娘である私とも全然話をしなくなってしまった。」

「フェイト、プレシアも今は研究で忙しいけど、今取り掛かってるものが仕上がればきっと。」

「うんわかってるよ。」

「研究だってプレシアとあなたの2人が幸せになるためのものです。だから今は寂しいかもしれないけど・・・・・・。」

「うんわかってるってば大丈夫私母さんが好きだもの。忙しくて私と遊んだり、魔法を教えたりできないからってリニスを作ったのもわかってる。」

「その通り、使い魔特に私みたいに高度な知性とハイレベルな魔力

を兼ね備えたものを作成して維持していくのは術者にとっても大変なものなんです。その気持ちを汲んであげなくてはいけませんよ。」
「うん。うふっさっきのはちょっとした自慢？高度な知性とハイレベルな魔力って。」
「失礼な！厳然たる事実です。」
「うふっ。」
「うふっ。さっ食べたら片付けを手伝ってくださいね。一休みしたら部屋で魔法のお勉強です。」
「はい。」
「じゃあ次高速詠唱の際の法人制御方程式の変化について。」
「あっそれ先週自分でやっちゃった。」
「はい？」
「それってこういう事だよね？圧縮した詠唱文に対して生成する魔法陣の式をこうやってこうそして最後に一括でコード変換合ってる？。」
「詠唱破棄の時のエンコード方法は？。」
「んっとね対応表の書き取りをしてだいたい覚えたんだけどほらっ？」
「あら？困りました今週の予定が粉々です。」
「あっ！ごめん。」
「謝る所じゃありません胸をはってえへん！と。」
「えへんっ！。」
「うふふっ大した者ですが、全部お1人で？。」
「うん。書庫で調べたの。」
「勉強熱心なのは良いですが大丈夫ですか？ちゃんと眠ってますか？。」
「平気勉強楽しいよ？。」
「うふっ。プレシアにはちゃんと報告しておきますよフェイトがとても頑張ってるって。」
「あっ！あんまり大げさに言わないでねがっかりさせたくないから。」

「はい！的確かつ正確に厳然たる真実のみを伝えますよ。さて、今日は何をしましょうね？。」
「あっ方式接続についてちょっとわからない処があるんだ。」
「じゃあ今日はそれを。早く済んだら外で模擬戦でもして過ごしましょうか？。」
「コンコン。プレシアリニスです。起きてますよね？入りますよ。」
「リニス何の用？。」
「報告ですよフェイトについての。」
「今忙しいわまたにして。」
「駄目です今月はまだ1度も聞いてもらってないですから。」
「好きにしなさい。」
「します。フェイトの成長は相変わらず順調を通り越して怖いくらいです。あの歳でもう初級魔法の殆どは呪文すら必要としないレベルですし、上級魔法もサポート用のデバイスを持たせれば一通りこなします。魔法戦闘についても中距離戦を中心に思い切りのいい戦闘をします。この辺りについて報告したことは覚えてもらってます？。」
「リニス馬鹿にしてるの？。」
「疑問点についての質問です。問題ないなら聞き流して。電気系の魔法は特に覚えが速くあなたの資質を受け継いでいる事もあるのでしょうが、認めてもらいたい、褒めてもらいたいという気持ちが強いんだと思います。」
「あの娘(こ)があなたにそんな事を？」
「まさか！そんな子供らしい我儘あの娘(こ)は口にしませんよ。それが良い事か悪い事かわかりませんけどね。」
「前から言おうと思っていたのだけどあなたは本当に生意気だわ。」
「心外ですね。改める気はありませんが。」
「もういいわ報告は聞いたから。研究の邪魔よ出て行って。」
「はいではまた。ああそれから今フェイトに合わせた杖を作っています。いくつか材料が足りないのでまた訓練で集めたいと思ってますが？。」

「好きになさい。」
「はい。」
「リニスいつ頃仕上がりそうなの？。」
「はい？。」
「フェイトの杖ですか？まだ設計段階ですからなんとも。」
「違うわあの娘自身の事よ。」
「今7歳ですから女性としての機能成熟まではあと7～8年くらいといった所ですか？魔導士としてはあと3年くらいですかね。」
「かかりすぎだわ1年で仕上げて。」
「無理ですよそんなの。」
「当面あの娘に魔導の全てを教える必要はないわ。実戦で使える高速魔法だけを一通り扱えればいい。これを伝えるのは初めてじゃないはずよ。」
「聞いてましたけどね。基礎や構造から教えないといざという時に使い物に。」
「リニス。」
「うっ！杖の設計を考え直します。思考型にすればシンパレート次第ですが、少しは実戦レベルになるのが早まります。ただ予算はかかりますよ覚悟を。」
「たかが杖1本いくらでも使いなさい。」
「他には何か？。」
「ないわ。」
「じゃあこれで失礼します。食事。」
「ん？」
「食事と睡眠はしっかり取ってくださいねプレシア。」
「行きなさい研究の邪魔よ。」
「おやすみなさいプレシア。」
「我が主人ながら本当にもうったく。また憂鬱を加速させる雨ですねイライライライラ。と苛立っても無意味なのはわかっているんですがはぁ。さて、フェイトも寝る時間ですし夜更かししないように本でも読んであげますか。」

「わおおおおおおおおん。」
「犬？いやオオカミですか。フェイト本を読んであげましょう。フェイト？いないんですか？念話で呼んでみますか。【フェイト】
【あっリニスごめんなさい今外なの。】
【外この雨の中いったい何を】
【遠くで犬の声がして、狼がいたんだけどなんだか様子がおかしくてそれで。くぅんくぅん】
【待って念話じゃどうも容量を得ません今行きますからそのままそこに】
「フェイト。」
「リニスごめんなさい。くぅんくぅん。」
「ああ狼の子供ですね。額に宝石がついてるこの辺り特有の種類です。」
「なんだか様子が変なの。近くに群れの狼がいるのに弱ってるこの狼をほったらかしで。」
「本当だ近くに何頭かいますね。とにかくこの雨では風邪を引きます屋敷の中に。」
「あのこの狼は。」
「うん。連れてきてください。」
「うん。」
「わかりましたよこの狼病気なんです。」
「病気？くぅんくぅん」
「感染性のあるこの病気が群れに広まるのを防ぐ為発病した個体は群れを追われるんです。群れの中の何頭かが監視して群れに戻らないようにしたりもするらしく」
「あっ。」
「幸い他の動物には移らないみたいです。念の為に消毒をフェイト。」
「リニスこの狼助けられない？。」
「その病気は原因不明の死病で治療法は見つかってないです。えっと発病から死亡まで早ければ一昼夜。」

「あっ！。くぅんくぅん。」
「フェイト残念だけど。」
「この狼私を呼んだんだ。最初はきっと誰でもいいから助けてって。だけど声にひかれてやってきた私を見つけて私の目を見て助けてって。」
「動物と接する機会をあまり作らなかったのは失敗でしたか。初めて自分を頼ってきた動物という事件で感情が理性を超えてしまっている。」
「リニス。」
「使い魔の生成呪法を使えば仮初の命とは言え肉体の命は維持できるけどフェイトが使い魔を持つにはまだ早すぎるし。私が使い魔じゃなくて普通の魔導士なら。」
「この狼私の使い魔にしちゃ駄目かな？。」
「あっ。」
「早く一人前になりたくて使い魔の作り方こっそり勉強してたの。」
「じゃあ知ってると思うけど使い魔を作るというのは簡単じゃないんですよ。使い魔の命を維持するために術者の魔力を常に与え続けなければならない。用が済んだら解呪するのが普通の使い方。」
「じゃあリニスは？。」
「私の場合はレアケースです。それに私だってああいえなんでも。とにかく軽い気持ちで手を出していいものじゃないんですよ。」
「軽い気持ちなんかじゃない助けてって言ったんだ私に。だから私が。」
「ああそうかあの子狼はフェイトにとっては今の自分自身なんですね。孤独の中で親とはぐれて助けを求める無力な子供。良いですか？フェイト使い魔の生成と言うのは死亡のの直前か直後に人造魂魄を動物の肉体に宿らせるものです。だから実際には命を助ける訳でも蘇らせる訳でもない。分かりますね？失った命を取り戻す魔法なんてどこを探してもないんですから。」
「だけど使い魔の呪法で生まれた命も生前の記憶を少しなら残るって。」

「正解ですフェイト。でもいいですか?フェイトいくつか覚悟を。使い魔を持つって事はたとえひと時でも1つの心と命と運命を共にするという事です。契約で縛り付けない限り使い魔にしたからって服従させられる訳じゃない。最悪契約の解呪という事で自らその命を奪う事になりますよ良いですね。」
「うんわかってるよリニス。それでも助けてって事なんだから私が。」
「では支度を。契約の内容は。」
「それはあとで今は仮契約って事で。待ってねすぐに助けてあげるからくぅんくぅん」
「我が求むは契約の証印を。契約の元新たな命と魂を。魔力が吸われる。」
「それが命の重さですフェイト。やめるなら今ですよ。」
「嫌だ魔力は私がもっと強くなればいい。だから新たな命をここに。」
「はぁはぁはぁ。」
「成功です早くも懐いてますね。ほら抱いてあげてください。」
「うん。くぅんくぅんくぅん。あったかい柔らかい。」
「それが命の温度です。」
「うふっうふっくすぐったい。」
「このことはまだプレシアには秘密にしておきましょう。もう少し状態が落ち着いてからでないと心配させてしまいますから。」
「うんありがとうリニス。」
「このことがプラスに働くと良いんですけど、フェイトにもプレシアにも。」
「それから小さな狼は私の使い魔になった。」
「さて、食事ですよっと。」
「こんなに。」
「あなたの食が細いのは承知してますが魔力ＵＰの為の栄養取ってもらわないと。」
「アルフほら待って。」

「ああ名前つけたんですね。」
「うんアルフって言うの。ほらアルフご飯。」
「私の魔力の増加に合わせてそれも気にならなくなってアルフも人間形態に変身できるようになって。」
「あ～フェ・イ・ト。フェイト～。」
「アルフフェイトご飯ですよ。」
「は～い。」
「ご飯。食べたらまた森に行ってかけっこしようフェイト。」
「駄目よアルフフェイトはお勉強です。」
「むぅぅぅ。」
「勉強が終わったら一緒に遊ぼうね。」
「うん。」
「戦闘訓練ならアルフも役に立つんですけどね。」
「アルフ役に立つ。」
「元が狼だもんね。」
「狼～。」
「はぁ上手く行かないわ。リニス、リニスお茶を入れて頂戴。」
「はいすぐに。フェイトアルフ食べたらお片づけを私はご用事がありますので。」
「ねぇフェイトリニス時々ご用事ってどこか行くけどどこ行ってるの？。」
「あっ多分母さんの所だよ。」
「お母さん？。フェイトにもお母さんいたんだ。」
「いたんだよ。」
「でもこの間読んだ本だとお母さんって子供の傍にいていつも守ってあげるんだって。フェイトのお母さんいつもフェイトの傍にいないけどなんで？。」
「それは私がもう子供じゃないよアルフ。」
「そうなの？でもフェイト背小さいし胸だってぺったんこだしまだ子供だと思うんだけど？。」
「私よりちびっ子に言われたくないな。」

「にゃはははははアルフは狼だからすぐ大きくなるんだって。」
「うんそっか。確かにこの二か月くらいで随分大きくなったよね。すぐに私より大きくなっちゃうのかな?。」
「うん早く大きくなってそしたらフェイトを守ってあげる。」
「うん楽しみにしてる。それまではいつもアルフの傍にいるからね。」
「アルフに命をくれたのはフェイトでいつも傍にいるのもフェイトでフェイトはアルフのお母さん?。」
「違うよ!でもそれでもいいよ。」
「う~んよくわからない。でもどっちでもいいフェイトと一緒にいられるなら。」
「プレシアお茶ですよ。」
「ゴホッゴホッ。」
「あんまり調子よくないみたいですね。」
「どうってことないわ。ちょっと根を詰めすぎただけ。」
「いやあんまり良くないですね気を付けてください。」
「あの娘(こ)が犬と一緒にいるのを見たわ。」
「ああ拾ってきたんですよ先月。死にかけてたのを可哀そうに思って使い魔に。今は仮契約期間です。」
「あなたが許可したの。」
「はい!。たいそう思い入れていたので見殺しにさせたら今後に影響が出るかと。」
「あの娘(こ)の魔力はまだ未発達使い魔なんて持つべきじゃないわ解除させなさい。」
「嫌です。フェイトはあの狼(こ)といるとよく笑います。自分を頼ってくる相手を可愛くもあり、自分が得られない愛情をせめて自分の使い魔には与えてあげたいというのもあるんでしょう。なにより聞き分けの良いフェイトが自分の意思を強く私に見せました。その意思を尊重したいと思います。」
「私の命令が聞けない?あなたはいったい誰の使い魔だったかしら?。」

「あなたのですよプレシア・テスタロッサ。ですが私が命じられたのはあなたの娘フェイトを一流に育て上げる事。大局的な視点でその命令を実行しています。あの娘とのアルフとの出会いやふれあいが必ずフェイトの力になるとそれがいつかはあなたとプレシア２人の為になると思っているから。」
「はぁぁぁぁぁ」
「プレシア」
「お茶が冷めてしまったわ入れ直して。」
「プレシアが何の研究をしているのか私は知らないし、私が作られる前のプレシアとフェイトの事も私は知らない。フェイトの話では昔は仲が良くてプレシアはとても優しい親子だったそうだけど、一般的知識に照らし合わせてもプレシアとフェイトの親子関係は少し悲しすぎる。一緒に食事する事はないし顔も数か月に一度あるかないか。んっ？アルフ」
「あっリニスご用事は終わったの？。」
「ええったった今ね。１人でお出かけ？。」
「うんフェイトがお勉強中だから庭とか倉庫とか。」
「そう奥の方には行かないようにねプレシアに見つかったら叱られます。お茶の時間には戻るんですよ。」
「うん。」
「はぁ公式よし、あとは状況に合わせてこの数式を。」
「お待たせしました。ごめんなさい。」
「ううん自習してたから。」
「そうどの辺りを？。」
「えっとね高速術式の展開方式関連この辺。」
「ああもうそんな所まで進んでたんですね偉いですよ。」
「えへへ。」
「ああプレシアが褒めてましたよ。フェイトがちゃんと勉強していて偉いと。」
「あっ本当。」
「フェイトには内緒にって言われましたけどね。この分なら来年く

らいにはもう1人前の魔導士になってるんじゃないかと。」
「来年か～うん頑張る。」
「はい。」
「時折私の胸を襲う切ないようなこの感情はフェイトへの同情なのでしょうか？そうでなければ私が知らずおそらくは知らないまま消滅していく親としての感情なのでしょうか？。時々考えてしまいます。まぁ考えたところで肩が凝るばかりなのですが。」
「リニス何か言った？。」
「ああごめんなさい只の独り言ですよ少々肩が凝ったなと。」
「じゃあもんであげるよどの辺。」
「いいですよ本当に。」
「ほらどの辺本当に。」
「あ～フェイトとリニス遊んでる。ずるい～。」
「アルフ。」
「遊んでるんじゃありません。ちょっと休憩してるだけです。」
「アルフもやるうりゃ～。」
「アルフあなたって子は～。」
「あ～尻尾引っ張っちゃやぁ～。」
「いきなり飛び掛かっちゃびっくりするでしょ。」
「だけど一つだけ。」
「さぁお風呂ですよ2人ともお風呂場へ。」
「それにしてもフェイトはあんなに魔法が出来るのに1人で頭が洗えないとは。」
「違うよ洗えるんだよ。目を開けられないだけで。」
「今のひと時が私の全てであるだけで。厳然たる事実であるために叙情的な意味でも。」
「さぁ明日に備えてお休みなさいです。今日はどうしますか？本を読みますか？。」
「あれが良いないつだか歌ってくれた歌。」
「歌ですか？あんまりうまくないですよ。それでもよろしければ。」
「歌ってリニス。」

「長いからここまでで一区切りとするけどここまで聞いた由生の感想は？。」
「フェイトお前結構壮絶な人生経験してるんだな。アルフとの出会いがそんな事とは知らなかったよ。リニスとのその後はどうしたのかまた聞かせてもらえるかな？。」
「うん良いよ由生。じゃあ今日もジュエルシード探索に張り切っていこうか。」
「わかったフェイト。じゃあまた今度聞かせてくれよフェイト。」
そして時間は過ぎていく

# 風の向こうの記憶なの後編

ＳＩＤＥフェイト

「それから1月程たったある日の事アルフとの仮契約期間が終わろうとしていた。」

「ん～魔力の総量も順調に増えているし問題なさそうですね。」

「うん。もうアルフを維持してるって感覚は殆どないかな。」

「そろそろ本契約ですね。契約の内容を決めなくてはですねフェイト。」

「そうだねリニス。」

「雨降ってきましたね今夜は嵐になりそうです。」

「ふーんふふんふーんふふんあっなんかドアが開いてる。ここは今まで入った事のない場所。あっ入るとフェイトのお母さんに叱られるって言ってたっけ。でも見つかったらごめんなさいすればいいか。では探検開始。」

「あと少し、あと少しなのに最後の一押しが足りない。方法はあるはずなのよそこに至る理論だってある。」

「あれがフェイトのお母さん。」

「誰?。」

「あっ。あ・あのこんにちわフェイトのお母さん。あたしフェイトの使い魔のアルフだよ初めましてでよろしく。」

「はぁぁぁぁぁふん。」

「きゃあ何するのよいきなり。」

「反応は悪くないみたいねこれじゃあ狼と言うより猿ね。」

「アルフ狼。猿違う。」

「使い魔にするなら素材を選ばないといけないのにこれじゃあリニスの失策ね。フェイトの出来も知れたものね。」

「リニスは良い奴だし、フェイトは凄いんだぞ。魔法だって凄いしいろんな事知ってるし。夜は一緒に寝てくれるし。」

「使い魔をペットと混同してるのかしら?・あなた使い魔の使命を知っているのかしら?。」

「うっ！使命・・・・・・。」
「アルフ、アルフ。」
「フェイトどうしました？。」
「あっリニス。アルフがいないんだ。念話にも出なくて困っちゃって。」
「あっ【そう言えばさっき奥の間のドアが。】まさか。」
【プレシア。】
【リニスあなたからの念話は非常時以外は禁じてたはずよ。】
【アルフにフェイトの使い魔に会いましたか？。】
【さぁ？。】
【まさか契約解除を。】
【第三者による強制解除や使い魔の破壊は契約者であるフェイトにもダメージが行くわ。私がそんな事すると思って？】
【アルフには会ってないんですね。】
【今手が離せないの。切るよ。】
「多分外です。今探索しますから。」
「アルフ、アルフ。」
「フェイトあそこ。」
「アルフ良かった心配したんだよ。」
「来ないで。」
「アルフ？。」
「使い魔って主人が目的の為だけに作り出すんだって本当？。維持するのが凄く大変だから目的に合わせて作って、目的が終わったら消しちゃうって本当？。」
「なんで？なんで急にそんな事。」
「多分書庫です。あなたに見せようと使い魔関連の本を出しておいたので。すみません。」
「フェイトも自分の目的が済んだらあたしを捨てる？あたしの事消しちゃうの？そんなのヤダ。フェイトに捨てられるのも消えちゃうのもそんなのヤダ。」
「捨てないよ。捨てたり消したりなんかしないよ。」

「でもあたしフェイトの使い魔だ。友達だって姉妹みたいだって思ってたのに。」
「友達や姉妹じゃないとダメかな?使い魔と主人って関係かもしれないけどあたしは楽しかった嬉しかった。大きくなったら守ってくれると言ってくれてすごく嬉しかった。」
「でも。」
「契約の内容考えたの、聞いてくれる?。」
「うん。」
「汝使い魔アルフ。主フェイトとの契約の元以下の契約を遵守し移行せよ。その四肢と心を持って自らが望む満足できる生き方を探し、それを行え。いかな地にあっても主と遠く離れても命が尽きるまでその制約を胸に。」
「ああ。」
「私がアルフを使い魔にしたのはアルフに死んで欲しくなかったから。だからこの先別に私と離れてもどこに行っても良い。自由な狼を縛る鎖を私は持たないし使わないよ。だけど、今までみたいに私の傍にいていろんな事をしてくれるなら私は嬉しい。アルフと一緒といろんな事が楽しくて嬉しくて心強いから。」
「えぐっえぐっえぐっ。」
「私とアルフは友達でも姉妹でもないけどだけどきっとね最高のパートナーになれると思うんだ。」
「最高の。」
「うん。最高の。ああほら自慢の毛並みがぐしょ濡れだ。帰ろう。」
「フェイト~。」
「使い魔も主人も関係ないよ今までもこれからもずっと2人で一緒にいようこれからもずっと。」
「うわぁぁぁぁぁぁん。うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁん。」
「そんな出来事があって、私とアルフは契約を結んだ。私が願った制約はそのまま、アルフが誓った制約は。」
「我使い魔アルフ。狼の血と誇りにかけてフェイトの心と身体を守りその身に訪れる災厄をこの手で振り払う事を誓う。」

「使い魔アルフ。」
「主フェイト。」
「「今ここに契約を。」」
「おめでとう契約成立ですね。」
「感覚的には特に何も変わらないかな？。」
「うん。」
「いろいろ変わってるんですよ。精神リンクの強化とか魔法資質の受け渡しとか。」
「勉強すればある程度は私と同じ魔法が使えるようになるんだよ。」
「それはカッコいい勉強する。」
「明日から生徒が２人ですね。ビシビシ行きましょう。」
「その後冬が深まる頃にはアルフの手足も随分伸びて。」
「うおおおおおおおおおおおてえりやあああああああああああ。」
「凄い。」
「見たか必殺パンチ。」
「こ・この馬鹿力パンチでバリアを砕くとは。」
「鉄拳無敵。」
「アルフは魔力を固めたり圧縮したりするのがうまいんだね。」
「身体能力も高いですし、結界系を上手く身に着けて行けばフェイトのサポートとしてはまずまずです。」
「まずまずじゃ駄目。超スゴにならなくちゃフェイトを守れない。」
「うふふ。」
雪が解ける頃にはもうすっかり大人の姿になってリニスの背を追い越して
「全く身体ばっかり大きくなって。」
「ご飯おかわり。」
私達は順調に魔導士として成長していった
「これがフェイトの新しい杖。まだ製作中ですけどね。」
「へえええええええ。」
「なんかこれは斧なの？ちょっと不細工じゃない？。」
「ＧＥＴ　ＳＥＴ。」

「「ああ。」」
「喋った。」
「喋りますよインテリジェントデバイスですから。フェイトが今学んでいる最終試験を習得する頃には完成しているはずですよ。」
「そっか私の杖か。」
そして夏が終わる頃
「アルカス・クルタス・レイギアス降り来りて眼下の敵を討て。」
「うわぁ凄い魔力。」
「アルフ耳を塞いで轟音が来ますよ。」
「バルエル・ザルエル・ブラウゼル突き立て雷光の剣サンダーレイジ。」
「うわぁ。」
「ああ。」
「はぁはぁはぁはぁはぁリニス成功？。」
「うん狙いも正確ロックオン精度も問題なし。良いでしょう最終課題クリアです。」
「やったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ。」
「やったぁ。ああ」
「フェイト大丈夫？。」
「ありがとうアルフちょっと気が抜けた。」
「魔力も使い果たしてますね。アルフフェイトを部屋に。」
「うん。」
「フェイトおめでとうよく頑張りました。」
「ありがとうリニスのおかげだよ。これからも宜しくね。」
「これからか・・・・・・。」
「プレシアリニスです。」
「入りなさい。」
「聞こえてましたかさっきの轟音。」
「雷撃系の高位魔法ね。あれはフェイトが？。」
「杖も使わず身体1つでね。」
「そう素晴らしいわ。」

「これでもう私がフェイトに教えられる事はなくなってしまいました。杖も今夜には完成ですし私の仕事は終わりですかね。」
「そうね終わりね。杖を完成させたらさっさと消えなさい。あなた程の高性能な使い魔維持も楽じゃないのよ。」
「そうします。でもその前にプレシア私との契約の履行もしくは制約覚えてますか？契約を履行したらご褒美をくれるって。」
「ああ元の山猫に戻って山にでも帰る？。」
「今更動物に戻ってもねぇ。」
「人型のままが良いの？でもそれじゃあ契約に。」
「反しますものね。大丈夫もっとずっと簡単な事ですよ。」
「ああ。」
「フェイト大丈夫？。」
「凄く疲れてるけどなんだかいい気分。」
「うんあたしも嬉しい。流石あたしのご主人様だ。」
「ありがとうアルフ。」
「フェイト、アルフ晩御飯の時間ですよ。」
「あっはい。」
「今日はちょっとビックリな趣向があります。フェイトは可愛い服を着て髪とリボンをしっかり整えてそれから食堂に向かいましょう。」
「フェイト久しぶりね。」
「母さん。」
「リニスに聞いたわ課題を全てクリアしたって。」
「は・はい。」
「今日はそのお祝い一緒に食事をしましょう。」
「あっはい。」
「はぁ～あの人も母親らしい所あるんだね。」
「親子ですからね邪魔しちゃ駄目ですよアルフ。」
「当たり前だよするもんか。」
「最後の高位魔法習得までどれくらいかかったの？。」
「えっと中級の術式接続で戸惑っちゃって、でもそれがわかったら

あとはすぐに。」
「好きな魔法は？。」
「えっとランサーとか射撃系は割と得意かもです。」
「そう。」
「なんか～親子っぽくないなぁ～。」
「一緒の食事なんて私が生まれてから初めてですしね。」
「まぁあの人の事はどうでもいいけどフェイトが嬉しそうだからあたしは嬉しいや。」
「さて、アルフ私は今夜から少々遠出をしないといけません。」
「あれっそうなの？。」
「フェイトにもあなたにももう教えられる事もないですしね。」
「う～ん？。」
「あなたがいればフェイトはもう大丈夫ですから。」
「あっそうかな？。」
「そうです。自信をもって。」
「ああそれからあとでフェイトに私の部屋に来るように伝えて。私からの贈り物があるからと。」
「うん。」
「それじゃあ。」
「行ってらっしゃい。」
「気を付けて。」
「さて、私は私のなすべきことを全て終えました。気がかりや心残りは山ほどありますが、役目は終わってしまったのですから素直に舞台から降りましょう。フェイトの杖、私は消えてしまうけど思いと意思はこの杖に残して。バルディッシュ闇を貫く雷神の槍夜を切り裂く戦陣の戦斧私の願いを込めた杖。」
「ねぇプレシア私実はあなたに嫉妬してたんですよ。フェイトが私の子供だったらよかったなって。そしたらこの手で抱きしめてうんと可愛がれたんです。だけど、プレシアの使い魔でなかったらフェイトにアルフに出会っていなかったら。だから嫉妬より感謝の方がちょっとだけ多い。お休みなさい可愛いアルフ愛しいフェイトさよ

なら私の意地悪で偏屈でちっとも優しくないご主人様。バルディッシュあの娘達を宜しくね。」
「リニスもういってしまったの？リニス。あの娘の杖もう完成していたのね。こんなはずじゃなかったのかしら。」
「そうなの？。」
「うんリニスからの贈り物だって。」
「あっ母さんごめんなさい。」
「あっ杖。」
「来なさいフェイト。」
「は・はい。」
「あなたの杖よ。リニスが残したの。」
「はい。」
「手に取って。」
「重いだけど暖かい。」
「ＧＥＴ　ＳＥＴ。」
「この杖私に合わせてくれる。」
「リニスが作ったものだもの。」
「はい。バルディッシュそれがあなたの名前。」
「デバイスフォームセットアップ。」
「うん。宜しくねバルディッシュ。」
「良い事フェイトその杖でもっと強くなってあらゆる望みをかなえる力をその手に宿しなさい。あなたはこの私の娘なのだから」
「はい頑張ります。」
「杖の扱いを覚えたら時々お使いに行ってもらうわ良いわねフェイト。」
「はい。」
「リニスもう行っちゃったのかいつ帰ってくるんだろう？。」
それから私はバルディッシュの扱いを覚えて、時々母さんの手伝いに行くようになった。ある時は実験の材料、ある時は書物や文献。時が過ぎる毎に、実験と研究が行き詰まる毎に母さんはいら立ちや怒りを隠さなくなるようになって。リニスがいた時より私達の家は暗く

なっていった
「なんだよもう。言われた通りの本を探してきたのに。」
「仕方ないよ母さんが知りたい事が載ってなかったんだから。」
「だからって叩く事ないじゃないか。フェイト痛くない？。」
「うん平気そんなに強く叩かれてないもの。」
「嘘だ傷になってるよ。ああもうリニスがいればな～あのおばばの事叱ってくれるのに。」
「アルフ汚い言葉を使わないで。」
「へぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ。」
リニスは半年たっても1年たっても戻ることはなく、私とアルフは何となくあの日何が起きていたのか、どうしてリニスがいなくなったのかわかったけど。それを口に出すことはなかった。庭園は移動をはじめ家の空気はもっと重くなって、アルフも私にはずっと優しかったけど少しイライラしてる事の方が多くなった。私は少し背が伸びて少し背中や手足に傷が増えて
「絶対、絶対おかしいよあんたの母さん。フェイトの事こんなに傷だらけにして、フェイトこんなに頑張ってるのに。」
アルフは何度か私に家を出る事を進めたけどその度に母さんは少し疲れて苛立ってるだけだからって私はアルフを宥めてそして
「フェイト急ぎの用事があるの探しものよ。」
「はい。」
「ロストロギア形態は青と赤の宝石一般呼称はジュエルシード。」
「ジュエルシード。」
「全部で２８個少しでも早く1個でも多く手に入れてきて頂戴。」
「私とアルフはジュエルシード探索の旅に出た。」
「これが私とアルフがこの世界に来た理由だよ由生。」
「フェイト結構すさまじい人生送ってるな。その後リニスは戻ってこなかったか。もしかしたら時の庭園の1部屋でそのまま消えないで倒れているのかもしれないなリニスは。プレシアからの魔力供給も止められてるみたいだしな話を聞く限りじゃ見つけた発動前の青いジュエルシードだフェイト。封印処理してバルディッシュに。」

「うんそうだね。バルディッシュ出来るよね。」
「ＹＥＳ　ＳＩＲ。」
「うん良い子だバルディッシュ。それじゃあ宜しくね。この辺りにあるのはこれ１個だけみたいだね。あとは今の所場所が分からない。」
そして時間は過ぎていく

# ジュエルシードの自然の驚異なの

ＳＩＤＥフェイト

「この前のフェイトの過去には驚いたぜフェイト。師匠であるリニスとの別れやアルフと一緒にこの世界に来た時の事情やら知ったからにはもっと協力していくぜ俺はな。」

「ありがとう由生。今日は訓練？それともジュエルシードの探索？どっちで来たの由生。」

「ジュエルシードの探索だな。まだ半分以上散らばったままだしな少しでもフェイトの方にジュエルシード集めないとな。」

「じゃあ行こうか？由生。ジュエルシード見つかるといいね（笑顔）。」

「お・おぅ（照れ）。」

「どうしたの？由生顔が赤いよ？風邪でも引いた？休んでく？由生。」

「フェイトの笑顔があまりにも可愛かったからなつい・・・・・。その笑顔はあんまり見せないでくれ他の人には。俺なら別に可愛いから良いけどな（ボソッ）。」

「えっ？可愛いって私が。そんな事言われると照れるよ由生。まぁ可愛いって言われて嬉しくならない娘（こ）はいないからね嘘でも嬉しいよ由生。」

「嘘じゃないさフェイト。フェイトは俺の中では誰よりも可愛いさもちろんフェイトが俺を好きならだけどなこれは。俺はフェイトの事はＬＩＫＥよりもＬＯＶＥだけどなフェイト。」

「ＬＯＶＥってそれって本当？由生。私由生の事使い魔として欲しくなっちゃったなぁ～ってのは冗談だけど由生の事欲しいなぁ～。」

「ああ本当さフェイト。俺は世界中の誰よりもフェイトの事が好きです。フェイトの為なら俺が剣であり盾になっても良いと思ってる。」

「返事は今回の件が片付いてからでもいい？由生。今はまだ協力者って事で一緒にいたいんだ私。」

「ああ構わないぜフェイト。おっとそろそろ反応が出てきそうな区域だなフェイト。ジュエルシードの反応探そうぜ。」
「本当だねそろそろ魔力反応ありそうだし別れて探そう由生。今日は楽な相手だといいね由生。」
ＳＩＤＥ由生
「どこにあるんだ？ジュエルシード。ってなんだこの地面を流れる砂は？。砂？まさか・・・・・・。」
「グオオオオオオオオオオオオオン。」
「出たな。【フェイト俺の方でジュエルシードの暴走体と遭遇したすぐこっちに来てくれ。】」
ＳＩＤＥフェイト
【わかった。それで今回の暴走体は？。】
【砂だ。砂を使うモンスターハプルボッカだ。弱点属性はフェイトが第１位で俺が次点だなフェイト。】
【すぐ行くよ由生。それまで何とか持ちこたえて。】
そして２人は合流して
「由生ハプルボッカが２頭いるように見えるんだけど？。しかも１頭は色違いだし」
「これは１頭青で１頭赤だな間違いなく。」
「じゃあさっさと片付けようか邪魔が来るといけないし。」
「ああなのは達が来る前に片付けてしまおうかフェイト。」
「ランサーセット。」
「シューターセット。」
「「ファイア。」」
「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」
ＳＩＤＥなのは
「見つけたよアリサちゃん、すずかちゃん。ジュエルシードのモンスターだ。って既に戦闘が始まってる。戦ってるのは由生君とフェイトちゃん！。」
「地面に向けて魔法撃ちまくってるけどどういう事？この辺一帯が砂だらけってのも気になるし。」

「ああもうそんな事より封印よ私達圧倒的に数が少ないんだから。由生とフェイトに取られてばかりなんだからねなのは、すずか。」
「レイジングハート。」
「フレイムディッシュ。」
「スノートライデント。」
「「「ALL　RIGHT」」」
「ディバイン・シューター」
「フレイムウィップ」
「アイスシューター。」
「グォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ。」
「今回は戦闘間に合ったみたいだね由生君。」
「ちっ来ちゃったかなのは、アリサ、すずか。だがジュエルシードは俺達が貰うよ。」
「渡さないなの由生君。私達だって戦えるんだから。」
「ボルグレインフリーズスラッシュ。」
「きゃあいきなり何するのよ由生。」
「渡さないって言ったろアリサ。だから邪魔してるんじゃないか。
【フェイト今の内に戦場を離してくれ。こいつら3人は俺が抑える。】」
「バルディッシュ。こいつらを誘導行けるよね。」
「GET　SET。」
「あっフェイトちゃん待って。」
「フェイトの後は追わせないって言ったろすずか。ボルグレイン。」
「YES　SIR。」
「フリーズウォール。これで俺を倒さない限りはお前らは進めない。さぁどうする?やるかなのは、アリサ、すずか。」
SIDEフェイト
「由生1人で大丈夫だよね?念の為に【アルフ、アルフ聞こえる?由生の応援に行ってあげて由生1人でなのは達3人の相手を。】」
【了解フェイトすぐ行くよ。場所はどこだい。】
【マンションから東に40分くらいの場所だよ。今は由生1人でな

のは達3人を氷の壁で進軍止めながら戦ってる。】
【マンションから東に40分だね。全速力で飛んで行くよフェイト。氷の壁が見えたら止まれば良いんだよね？その近くに由生達がいるはずだから。】
【うんそう。お願いねアルフ。私はジュエルシードモンスター2頭を相手にしていて援護には向かえそうもないから。】
【了解。あと少しで着くよフェイト。氷の壁が徐々に見えてきたから。】
【由生どこだい？フェイトに言われて応援に来たよ。】
【アルフかここだ。3人相手はやっぱりキツイ。アルフは他の2人の相手を頼む。】
「見つけたよおチビちゃん達。ガブッていくって言ってたよね前に。」
「あらら増援由生。仕方ないなのはは由生を倒して私とすずかでこのお姉さんの相手するから。」
「アルフの相手はアリサとすずかか。その2人は炎熱と氷結持ちだから気を付けてなアルフ。」
「バルディッシュスマッシャー。」
「グォオオオオオオオオオン。」
「グァァァァァァァァァァァァ。」
「当たらないよ。サイズフォーム。そしてスラッシュ。」
「グォオオオオオオオオン。」
「グァァァァァァァァァァァァ。」
「流石に2頭相手に無傷って訳には行かないね。バルディッシュランサーファイア。」
「グォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン。」
【由生、アルフ倒したから全速力で私の魔力を辿って来て。なのは達は無視して良いから。】
【分かった。今すぐ行く。】

「じゃあなのは、アリサ、すずか。終わったみたいだからあっちに行かせてもらうぜ。氷は解除してくから追ってくるなら好きにしな。」
「うう結局勝てなかった。私達3人じゃ修行不足なの？。」
「ジュエルシード封印。」
「青はフェイトに赤は俺にそれぞれ回収出来たな。これで残りは青が13個に赤が3個か。」
「うんそうなるね。青はまだまだ探さないとね。」
時間はまた少し経過していく

# 砂竜のボスからジュエルシードを捕獲せよなの

ＳＩＤＥなのは

「まさか大島でジュエルシードの反応が出るとは思わなかったなの。しかも裏砂漠からなんて思わなかったなの。」

「この広い砂漠のどこに目標がいるのよユーノ。これじゃあ暑さで体力の方が先になくなっちゃうわよ。」

「水は私の氷溶かせば何とかなるからいいかもしれないけどこんなに暑いと私達の方が先に参っちゃうよ。それでジュエルシードの反応は？」

「徐々にこっちに向かってきてる。しかも砂を出たり入ったりしてる。これって何かにジュエルシードがくっついてる感じだね。」

「ねぇユーノ君私なんだかとっても嫌な予感がするんだけど、気のせいかな？。あれって砂竜？大きいのと小型が一緒にいるんだけど、あの大きいのからジュエルシードだけ奪い取れなんて事になってないよね？。」

「いや～あの大きいドスガレオスからジュエルシードだけ回収する事になりそうだなのは。ドスガレオスの額にジュエルシードがくっついてるからね。ドスガレオスを気絶させてその内にジュエルシードを封印して回収するしかなさそう・・・・・・。」

「ドスガレオスにしては大きすぎなんだけど～ユーノ君。あれを気絶させてその間に封印処理とかなのはちゃん以外無理なんだけど・・・・・。弱点は私が弱点だから気絶までは行けるだろうけど。アリサちゃんの属性はほぼ効かないからあとはなのはちゃんの無属性に頼るしかないんだけど・・・・・・。」

「あたしが属性的に役立たずとかありえないんだけど～〉〈。なんでこういう時に限って炎属性効かない敵になったりするのよ。まぁ言っててもしょうがないわねさっさと片付けるわよフェイトと由生が来る前に。」

「なのはは魔力を封印まで温存しておいて、あれはあたしとすずかの２人で何とかして見せるから。」

「えっ！でも・・・・・？。私も攻撃したいんだけどアリサちゃん。アリサちゃんとすずかちゃんだけで本当に行けるの？。」
「やってみせるわよなのは。例え炎が効かなくてもやり方はあるっての。心配しないで気絶直前には攻撃に参加して貰うからそれまで待機してなさい。」
「グァァァ

「これでやっと4個目か～あたし達は。まだまだ足りないわねフェイト達の個数には。」
「疲れたし帰って休もう皆。それにしても由生とフェイト今回は来なかったわね。来ると思ってたんだけど。」
「まぁ何かあったんじゃないの？あっちでの用事が。」
その頃時の庭園では
ＳＩＤＥフェイト
「こんなに時間をかけてたったこれだけ。これでは褒める事は出来ないわね。フェイト残念だけどあなたをお仕置きしなくちゃならないわ。それは？」
「これは母さんにって・・・・・・。きゃあぁぁぁぁぁぁ。」
「そんな事をする暇があるならもっとジュエルシードを集めてきなさい。ジュエルシードは母さんの研究に対して大切な物なの。もっと頑張って頂戴フェイト。」
「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁはい母さん。」
「いい加減にしろプレシア・テスタロッサ。あんたは仮にもフェイトの母親だろなんでこんな仕打ちが出来るんだよあんた。娘を道具としか思ってないってのかよ。」
「年上に対する口の利き方がなってないわねあなた。あなたはフェイトの何？。」
「フェイトが傷つくのも、痛めつけられるのも黙って見てられるか。あんたがこんなのだからフェイトは感情がなくなっていくんだろうが！。」
「駄目、やめて由生。これは私が頑張れなかった事に対しての母さんの愛の鞭だから。だからこれ以上は口を出さないで由生。」
「しかし、フェイト・・・・・・。明らかにやりすぎだろこれは。こんな事されて黙ってるなんて俺には出来ない。」
「仕方ないの由生。私が次からもっと頑張ればいいだけだから。だからここは我慢して由生。」
「フェイト私はあなたに期待しているのよ。次こそは母さんにこんな事をさせないで頂戴ね。あなたの働き次第で母さんは研究を頑張

れるのだから。」
【アルフ帰ったらフェイトの治療を頼む。俺はまだ回復系統の魔法を覚えてないから。】
【わかってるよ由生。こんな事なら報告なんかに戻ってこないでジュエルシードを探してた方が良かったかもしれないねあんたには辛い場面を見せちまったね由生。】
【まさかフェイトの母親があんなのだとは思ってなかったよ俺。フェイト俺の前では無理して明るくふるまってたんだな。母さんからの愛情をあんまり知らないんだなフェイトは。】
【目的の物６個でもお仕置きされるなんてフェイトがかわいそうだな俺としては。１０個くらいでも同じ事されてる気もするし全部集めてから報告するしかなかったのかな?アルフ。】
【あの鬼ババァの考えなんかあたしにもわからないよ由生。あたしはフェイトが幸せならそれが1番なんだけどねぇ～由生との会話で最近やっと明るくなってきたと思ったばかりなのに・・・・・・。】
【帰ったら俺がフェイトのケアに入るよ。アルフは傷の治療だけお願いする。フェイトが悲しいのも痛いのも俺には我慢ならないんだやっぱりな。】
【ごめんよ由生。次の場合はあたしも抗議してみるよ。まぁあたしが抗議した所であの鬼ババァは聞きゃあしないだろうけどね。もしかしたらフェイトと離れる結果になるかもしれない。それでも言わずにはいられないよね由生。】
【ああ今回はこっちまで攻撃が来なかったけど次はどうなる事やら。俺も次は最初からあの母親に抗議として攻撃するぜアルフ。さぁ拠点に帰ろう皆で。】
そして夜は更けていった

# ジュエルシード発動そして次元震の驚異なの

ＳＩＤＥフェイト

「あれ？ここは。私達確か母さんに報告に行ってそれで・・・・・・私また母さんにお仕置きされて気を失ってたんだねアルフ。由生はどこ？母さんに色々と抗議してたからちょっと心配なんだけど？。」

「フェイト～やっぱりあの鬼ババァなんかと一緒にいちゃいけないよ～ムニャムニャ。由生これからもフェイトのケア宜しくね～。」

「ア・アルフ何言ってるの？わ・私は別に母さんと一緒が嫌なんじゃなくて、あれは私が頑張れてない愛の鞭だって何度言ったら・・・・・って寝てるの？アルフ。」

「寝かせておいてやれフェイト。帰って来てからフェイトの傷の治療で今まで魔力使いっぱなしだったんだから。俺が回復魔法使えればよかったんだけどなフェイトすまない。次からはフェイトの母プレシアには何があっても抗議するぜ俺。例え攻撃受ける事になろうともな。だって俺フェイトが痛いのも苦しいのも嫌なんだ。フェイトにはいつも笑顔でいて欲しいフェイトが笑っていてくれるから俺だって元気でいられるんだぜフェイト。って何恥ずかしい事言ってるんだろうな俺。」

「由生（照れ）。恥ずかしい事言ってないで状況はどうなってるの？ジュエルシードは？。」

「なのは達から連絡が来たよ俺達が報告に行ってる間に大島で発動したジュエルシード１個を入手したってな。裏砂漠だから昼間は暑いし夜は寒いそんな場所でジュエルシードを封印したってんだから大した者だよあいつらも。でも今後は渡さないけどな。」

「その内なのは達が持ってる４個も私達が入手しないとだね由生。そしてありがとうアルフ私の傷癒してくれて。」

「そんな事はどういたしましてだよフェイト。あたしはフェイトが幸せならそれで良いんだからね。だからフェイトこの事件を終わらせて早い所由生の気持ちに返事してやりな。」

「ア・アルフ、それは今は関係ないでしょ～〉〈。確かに由生の私へ

の気持ちは嬉しかったから早く返事してあげたいけど・・・・・・それより今はジュエルシードでしょ。」
「次に発動しそうなのが海鳴市の街中で今は静かに眠ってる状態だな。夜の街中だから見つけずらいし魔力を撃ち込んで強制発動させるしか手がないと思う。そうしたらフェイトお前の出番だ。俺のボルグレインには封印形態はないからな。まぁそれはアリサとすずかにも言える事だが。俺ら3人のデバイスには封印形態は存在しないんだ。その代わり攻撃のフルドライブとも呼べる形態が備わってるけどな。俺のボルグレインは基本の双剣形態、連結刃の薙刀形態、フルドライブの大剣形態の3つだな。その3つのモードを組み合わせたのがボルグレインになる。まぁ俺はなのはの家では剣術習ってるからな今度見せてやるよフェイトにも。」
「海鳴市の街中か。封印失敗すると次元震が発生する恐れもあるねこの場合。次元震が小規模でも街1つを消すには十分すぎる威力があるからね。最悪の場合私が素手で直接止める事も考えないとならない由生。」
「素手でジュエルシードを封印とか普通に暴走してる可能性あるし手にダメージ行き過ぎてるだろそれ。怪我しないでくれよフェイト。お前が傷つくと俺のやる気がダダ下がりしちまうんだからな。バルディッシュそうならないように頼むぜ封印。」
「お任せを由生様。私が破損してもマスターに直接封印などさせないようにします。これは男と男の約束だ由生。」
「ああ頼んだぞバルディッシュ。それとボルグレイン少しでもフェイトが危なそうな行動するようならすぐに教えてくれよ。俺も直接封印の魔力を少しでも出してみるからよ。ボルグレインには封印機能はないけど俺だってそれくらいは手伝えるはずだ。」
「さて、そろそろ出発しないか?アルフ、フェイト。多分なのは達も探し始めてるだろうしな。どっちが先に手に入れるか勝負と行こうぜ。まぁフェイトが負ける訳ないけどな。」
「そうだね由生。あたしのフェイトがあんなちびちゃん達に負けるはずがないよ。あたし達はあたし達の仕事をすればいいだけだね今

回は。」
【見つけたぞフェイト、アルフ。発動前のジュエルシードだ。向こうもまだ気づいてない。ジュエルシードに魔力を撃ち込んで強制発動させた後速攻で封印するよフェイト。】
【了解由生。私が魔力を撃ち込むから少し離れてて由生。眠れるジュエルシードよ目を覚ましなさいはぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ。】
「強制発動?こんな街中で。なのはあっちも気づいてる強制封印をお願い。」
【フェイト今だ強制封印の砲撃を。】
【了解由生。「行くよバルディッシュ。」】
「スパーク・スマッシャー」
「レイジングハートお願い。」
「ディバイン・バスター。」
「「シュート!。」」
「なのは向こうより先にジュエルシードを。」
「フェイト向こうより先にジュエルシードを。」
「させないよ!ユーノとか言ったっけ?これ以上邪魔するんなら問答無用だよ。」
「クッ!やっぱり使い魔。あの娘(こ)の使い魔か?だとしてもジュエルシードは渡せない。」
「アリサ、すずか悪いがフェイトの邪魔はさせないよ。少しでもこっちはジュエルシードが必要なんだ。悪いが相手してもらうぜ。」
「由生あんた本気でフェイトの側につくみたいね。こうなったら遠慮しないわよ由生。私達だってやれるって所見せてあげるわ。」
「由生君本当にフェイトちゃん側なんだね。私だってアリサちゃんと一緒にやれるって事見せてあげるからね。」
「できればなのはとは戦いたくなかった。でも邪魔をするなら仕方ないから相手になるよなのは。」
「私もできればフェイトちゃんとは戦いたくない。だけどジュエルシードを集める理由をまだ聞いてないし私もユーノ君の手伝いは譲れない。ジュエルシードを巡る限りお互いに争いあう事は避けられ

ないんだ。だから私が勝ったら聞かせてもらうよフェイトちゃんがジュエルシードを集める理由を。」
「勝てたら話してあげるよなのは私がジュエルシードを集める理由でもなんでも。さぁやろうかなのは。フォトンランサーファイア。」
「これくらいは当たってやれないなの。ディバインシューターシュート。」
「当たれない。フォトンランサー。」
「当たらない。ショート・バスター。」
「くっ！弾くしかないか。サイズ・スラッシュ。」
「当たれないの。ディバイン・バスター。」
「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ。このままじゃ。速度で振り切ってジュエルシードを封印した方が良いかも。よしっそうと決まれば。」
「あっ！待ってフェイトちゃん。追いつかなくちゃレイジングハートもっと速く。」
「よしっ！ジュエルシード封印。」
「追いついたジュエルシード封印。」
「ガキン！。」
「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ。バルディッシュ？。いけないバルディッシュ戻って。」
「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ。レイジングハート？大丈夫。って埋まっちゃって動けない。」
「マスター由生。このままではフェイトが危険です。強制封印する気ですジュエルシードの暴走を。戦いは先延ばしにしてフェイトの援護に向かう事をオススメします。」
「くっ！アリサ、すずか戦いは先延ばしだ。俺はフェイトを助けに行く。お前達はなのはを助けに行かないのか？。これ以上は邪魔するなよ。今行くぞフェイト。」
「なのはちゃん埋まっちゃってるけど大丈夫？今助けるね。」
「すずかちゃん私よりフェイトちゃんを。」
「大丈夫よなのはそっちは由生が行ったわ。だから多分大丈夫。」
「フェイト駄目だ危ないやめろ。って言っても聞かないよなこの場

合。仕方ないフェイトの手を守るぞ。ボルグレイン俺の手に最大の魔力障壁を。止まれ、止まれ、止まれ、止まれ～。ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

「あっ！由生。私の為に手が・・・・・・大丈夫？由生。」

「これくらいフェイトの手が傷つくよりはなんともないぜ。しかし、ジュエルシードは封印出来たな。さっきの暴走が次元震か？小規模っぽかったけど凄まじいエネルギーだったな。」

「フェイトバルディッシュに格納を。なのは達また次のジュエルシードで会おうぜ。じゃあな。」

「フェイトちゃん、由生君。結局私また何もできなかった。危険だってわかっていたのに。ユーノ君私もっと強くなるよこれから先も。」

「なのは・・・・・・。」

そして夜は更けていく

# それは初めての共闘なの

ＳＩＤＥフェイト

「フェイトバルディッシュの様子はどうだ？あのエネルギーを受けたんだからまだ復帰に時間がかかるだろうが。」

「バルディッシュはさっきリカバリーかけたばかりだから丸１週間は使い物にならないね。それはなのはのレイジングハートも同じだろうけどね。」

「由生、フェイト今回の次元震で管理局が動くなんて事にはならないよね？管理局に目をつけられたら色々と厄介になるからさ。」

「俺はその管理局が何なのかわからないから断言しようがないけどあれくらいで動く管理局ならそんな大したチームじゃないだろうおそらくな。」

「アルフは心配しすぎだってば。あれくらいの次元震で動く管理局じゃないよ。由生の言う通り気にしすぎだってアルフ。」

「だと良いんだけど・・・・・あたしは嫌な予感がするんだフェイト、由生。どうにも嫌な予感が頭から離れない。」

「ねぇ由生この青いジュエルシードだけど、ボルグレインで今日だけ預かってくれない？」

「ああ構わないぜボルグレイン！っていててっやっぱりあの時のダメージで今日だけは上手く手を握れねぇや。」

「ＰＵＴ　ＩＮ。」

「あっ治療するよ由生。そこに手を置いて横になって由生。今日は私の代わりにごめんね由生これが私の手だったら気にせずに済んだのに。」

「馬鹿な事を言うなよフェイト。誰の手でも怪我したら痛いっての。俺が自分でフェイトを庇ったんだから私の手ならとかそんな事言うなよな。」

「う・うん。悪かったよ由生。でもよく封印出来たよねあのジュエルシードの暴走を。下手したらあのジュエルシードだけ破壊しなきゃならなかったんだから。」

「言われてみれば確かにその通りだったな。破壊で1個ジュエルシード紛失にならなくてよかったよ本気(マジ)でな。1個粉砕なんて事になってたらと考えると恐ろしいわ本当に。」
「はい治療終わったよ由生。お願いだから今後はこういう無茶だけはしないで。例え私が危険になっても由生が傷つく事はやめてね。私だって由生が傷つく所は見たくない。」
「俺だってフェイトが傷つく所なんか見たくないからそこだけはわかってくれフェイト。だから無茶だけはするんじゃないぞ。治療ありがとうな」
「どういたしまして由生。」
「それより2人ともいつまで手を握り合ってんだい？いい加減お腹いっぱいなんだけど・・・・・・。」
「あっご・ごめんね由生。治療したばかりなのに手を握っちゃって。」
「こっちこそすまんフェイト治療したばかりなのに手に力込めて握っちゃって。」
「はぁぁぁぁぁぁやれやれフェイトに告白した由生だけどこれじゃあ先が思いやられるね。」
「さて、今日は寝よう2人とも。明日からはまたジュエルシード探しをしなくちゃならないんだから。」
「じゃあ俺はなのはの家に帰るな。あそこが俺の現在の住まいだしよ。それになのはにも謝らねぇとならないしなこの手の怪我で。」
「あっじゃあまた明日ね由生。なのはにもごめんって伝えといて。」
「あいよフェイト。お前が気にする事じゃねぇよこの手についてはな。だからなのはにもごめんじゃねぇよお前からはな。」
「ありがとう由生。じゃあまた明日ね。」
そして由生がなのはの家に帰りついて
ＳＩＤＥなのは
「ただいま帰りました。」
「お帰りなの由生君。私に何か言う事ないかな？なの。」
「ジュエルシードの暴走に対して危険な直接封印した事については

正直すまんなのは。だが、フェイトを守れたし俺としては名誉ある負傷だと思ってる。治療はフェイトがしてくれたから安心しろ。まだ手は握れないけどな。」
「もう由生君は無茶しすぎなの。人に無茶するなとか言っといてあれは無茶なんじゃないの？手だってこんなに怪我してるし無茶しすぎなの。」
「すまないななのは。なのはだけじゃないあの場にいた全員にすまないだな。俺の無茶のせいで心配をかけた。」
「えへへぇ～これな～んだぁ由生君？。」
「いいテープレコーダー！なのはお前どこからそんなもの持ちだしたんだよ。」
「えへへぇ～お父さんから借りちゃった。明日アリサちゃんとすずかちゃんにも持って行って聞かせようっと。」
「なぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ何言ってるんだなのは。そ・それだけはやめてくれ頼む。」
「じゃあ今日封印したジュエルシード出して。それなら明日聞かせるのはやめてあげるなの。」
「ジュエルシードは出せん。あれはフェイトの物だからな聞かせたけりゃ好きにしろ。」
「確かに聞いたからねぇ～由生君。じゃあなのはの好きにさせてもらうよ～。」
「さぁもういいだろうなのは明日も学校があるんだ。今日はそろそろ寝ないとな。俺は風呂入ってから寝るけどな。」
「うぅぅ～由生君がつれないよ～。いいもん明日恥をかくのは由生君だもん。」
「まぁ確かに俺は恥をかくけどな。それを言ったらなのはの過去もばらしちまうかもな。いい子でいなきゃならなかった寂しい過去を。」
「そ・それ言ったら由生君でも許さないからね。あの時のなのははどうかしてたのお父さんが入院してたからっていい子でいなきゃなんて。」

「言う訳ないだろ今回のはばらされても仕方ない俺の落ち度だしな。さてじゃあまた明日ななのは。」
「うんお休みなさいなの由生君。」
その頃時空間では
ＳＩＤＥクロノ
「やっと事件が動き始めましたねクロノ執務官。それで該当魔導士2組はどうしてるのかしら?。」
「小規模とは言え次元震ですからね艦長。今は2組とも動けないかと。次回あの2組がぶつかり合う事があれば自分が出ます艦長。」
「お願いしますねクロノ。それはそうと旅は順調かしら?。」
「順調ですよ艦長。次こそは次元震を発生させずに食い止めて見せます。それと事件の中心人物とも思える2組の魔導士についても。」
「頼もしい限りですねクロノ執務官。さて管理外世界とは言え小規模な次元震放っておくわけにはいきません。迅速に解決に向かいましょう。」
「クロノ執務官すぐにでも出られますね?。次こそはクロノ執務官の出番ですからね。」
「お任せを艦長。あと1人ジュエルシード発掘で連絡が取れなくなってるスクライア一族の考古学者がいましたね。その者についても探し出さなくては。」
「ああスクライア一族から捜索願いが出てる彼ですか。確か名前はユーノ・スクライアでしたね。」
「ユーノ・スクライアいったいどこで何をしているのやら?。これ以上はスクライア一族に心配かけるだけだってのに。」
「本当にどこにいるんでしょうかねぇ～今。無事ならいいのですけど。」
「全くだ。一族の者にも連絡せずに1人で何をやっているのやら・・・・・・。連絡くらい入れればいいのに。」
「さて、発掘されたロストロギアしっかりと回収していきましょう皆さん。」
「はい。」

そして翌朝になり学校で由生の恥ずかしい告白がばら撒かれる等があり1週間後の夕方

ＳＩＤＥフェイト

「バルデッシュ気分はどう？。」

「リカバリーコンプリート。」

「そう。さて、今日からまたジュエルシードを探していくよ由生、アルフ。」

「そうだなフェイト。今日からまた再開だなジュエルシード探しを。俺の手もだいぶ完治してきたしな最近になって。まぁ本当になのはが俺の録音を流すとは思わなかったけどな次の日に。」

「あははは災難だったね由生。でも今回は渡せないよねジュエルシード。」

「その通りだなアルフ。今回はどんなジュエルシードモンスターでも渡せないよなやっぱり。」

「まぁよほどの強敵なら共闘になっちまうけどね普通に。」

「まぁ最近はジュエルシードモンスターも強くなってきてるし共闘もありえるかもな。っと見えてきたぞフェイト、アルフ。今回は樹のモンスターのようだ。」

「樹かい今回は。じゃあ火の魔法が良く効きそうだね。こっちには炎熱変換能力持ちはいないしちと厄介だねぇ～。由生向こう側。」

「なのは達か。あっちもジュエルシードを封印する気満々みたいだし今回は属性的に共闘な流れかな。アリサ、すずか、なのは今回は共闘と行かないか？ジュエルシードの癖にバリアを張るんだよこいつ。」

「バリア張るの？こいつそれはちょっと厄介だねぇ～由生。でもジュエルシード封印までは共闘するけどその後は奪い合いよ。」

「しょうがないねぇ～それぱかりは。じゃあ共闘と行きますか。なのは、フェイト砲撃してくれ。」

「スパーク・スマッシャー。」

「ディバイン・バスター。」

「パキィィィ

「やっぱりバリア。今だよ由生、アリサ。」
「ボルグレインフリーズ・スラッシュ。」
「フレイムディッシュフレイム・スラッシュ。」
「グギャァァァ

シューター。」
「フリーズ・シューター。」
「うわぁぁぁ

# 遂に出現その名は時空管理局なの

ＳＩＤＥフェイト

「今戻ったぞ～フェイト、アルフ管理局の執務官とやらはあっけないほど倒せちまったよ無傷でな。」

「仮にも管理局艦船の切り札だよあいつ。それをよく無傷で倒せたねって誰？あんた。」

「お帰りなさ～（ピシッ）あなた誰ですか？由生の声が聞こえたと思ったんだけど。」

「嫌だなフェイト、アルフ俺だよ由生だよ。」

「「えええええええええええええ。」」

「はい由生鏡。今の自分の姿を確認してご覧。」

「えっ？どこかおかしい（ピシッ）。な・なんじゃこりゃぁぁぁ

だった?由生。」
「あの野郎警告もなしにいきなりフェイトに発砲して傷つけやがった。いくら俺でもそれだけは許せねぇ。今頃なのは達は管理局に捕縛されて今後はジュエルシードは管理局が探すからあなた達は元の生活に戻りなさいとか言われてるんだろうな。自分達に都合良く取り込む為にまぁそうしない為に帰り際に良く考えてから返事をするんだなって言ってきたけどな俺。」
「おっと噂をすればなのは達から念話だフェイト、アルフ。少し黙っててくれよ。」
【どうしたなのは?俺に念話接続するなんて珍しいじゃないか。いつもは口頭で伝えてくるのにさ顔合わせてから。さては、管理局に関してか?この念話は。】
【その通りなの由生君。あの人達フェイトちゃん達の事は忘れて元の生活に戻りなさいとか言ってきたんだよ?それに反論しようとしたら民間人だから協力させられないの1点張りでもうね頭来るよ本当に。】
【まぁそれが向こうの戦略だからなこの場合。なのは達を自分達に都合良く組み込む為の方便って奴さそれはな。そのまま協力申し出るんじゃねぇぞなのは。ならこう言ってやれ友達の目を覚まさせるのに民間人とか軍人だからって関係あるんですかってな。それでも黙らないようならクロノはなのはよりは年上だからお兄ちゃんとか呼んでやれば1発でノックアウトできるだろうよ。あいつ女に関しては免疫なさそうに見えるからよ(笑)これで駄目なら泣きそうな顔で3人で上目遣いに見てお兄ちゃん発言してやれ。そうすりゃあなのは達の自由行動を認めてくれるだろうよ(笑)】
【あっその手があったかちょっとやってみるね由生君。】
【くれぐれも嘘だとバレないようにやれよなのは。】
【わかってるの由生君。色々と教えてくれてありがとうね。】
【早速効果てき面なの由生君。クロノ君も慌ててるの。】
【やっぱりあの執務官は馬鹿だな。こんなのが執務官だとはとても思えない。】

【これであの執務官も少しは考えるだろ。お前らを命令系統に組み込もうとかはなくなると思うぜ。】
【色々とありがとうなの由生君。】
【あとは命令拒否権は取っといた方が良いぞ3人ともそうじゃないといざという時自由に動けないだろ。】
【命令拒否権あんまり使いたくないなの。でもフェイトちゃん達を止める為には使わないとなの。】
【俺達だって遠慮しないからななのは。多分決戦は海の上になるだろうからな。俺達だってジュエルシードは渡さないぜなのは。】
【負けないなの。でも何で海の上ってわかるの？。】
【多分いくつかのジュエルシードは海の中に落ちてる気がするんだ俺としてはな。まぁ本当かどうかはわからないけどな。】
【本当にありがとうね由生君。じゃあまたね由生君。】
「ふぅぅぅやっと念話が終わったぜ。すまないなフェイト、アルフ。念話が長くなってすまない。あの執務官の対応策をなのはに教えてた。」
「しょうがないね由生。しかし、管理局も無駄な事が好きだねぇ～あの娘達を戦力として命令系統に組み込もうとするなんてさ。あの娘達だって命令系統に組み込まれるのは嫌だろうに。」
「その為になのは達には命令拒否権取っとけって言っといたアルフ、命令拒否権さえあれば決戦が海の上になろうとも大丈夫だからな。」
「決戦が海の上の根拠は？由生。私には海に落ちたとか今はまだ分からないしどうしようもないと思うんだけど？。」
「それに関しては完全に俺の勘だなフェイト。何となく海の中にいくつか落ちている気がするんだ。」
「さぁここからは管理局に補足されないように探す必要があるから今までよりも難しくなるぞ動きが。」
「うんそうなるね由生。ジュエルシードは探す、ただし管理局に見つからないようにだよね由生。」
「その通りだよフェイト。管理局が動いたとなると厄介だからな。

俺もこれから先はなのはの家に帰る訳にはいかねぇやフェイトこのマンションで一緒に過ごしてもいいか？フェイト。」
「それは構わないよ由生。私達の立派な協力者だしね、このマンションで一緒に暮らしながらジュエルシード探そう由生。」
「ありがとうなフェイト。さて、管理局がここを見つけないのを祈るばかりだな。」
「さて、１回引っ越し準備の為になのはの家に帰るわ俺。じゃあまたあとでなフェイト。」
「うんまたあとでね由生。」
「さて、桃子さんには納得してもらわないとな。」
ＳＩＤＥなのは
「ただいま帰りました桃子さん。」
「急で悪いんですが、遠見市にある高級マンションに引っ越しする事になりましたので自分の物を全部持って行きたいんですが良いですか？桃子さん。」
「急すぎるわよ由生君。今まで私達が家族同然として接してきたのにいきなりどうしたっていうの？。」
「なのはのかかわってる事は聞きましたよね？あれには俺もかかわっているのでここを知られたくないので暫くは遠見市のマンションに引っ越しをという訳です。なのはも荷物を抱えてアリサ、すずかと一緒に出掛けましたよね？桃子さん、あれも俺がかかわった結果です、でもなのはには怪我なんかさせませんよ。もちろん俺とその協力者にもね。」
「そう言う事なら仕方ないけど、あとで必ず帰ってくるんでしょうねここには由生君。」
「全てが終わったら帰ってきます必ず。まぁその前に帰ってくるかもしれませんけど。」
「それならよし、思う存分その協力者の元でやってきなさい由生君。まぁこんな夜にやってる引っ越し業者はないから明日以降になっちゃうけどね引っ越しは、だから今日はあなたの部屋でゆっくりしていきなさい。明日からはそっちに移るんでしょうから最後の思い出

作りね由生君。」
「そうします桃子さん、また急な話ですみませんでした。俺自身そのなのは達の協力組織に俺1人で喧嘩吹っ掛けちゃいましたので事件終わったらその娘と一緒に逮捕かもしれませんけど・・・・・。ではおやすみなさい桃子さん。」
「おやすみなさい由生君。」
「それにしても由生には驚かされたわよねぇ～なのは。まさか3人揃って命令拒否権取っとけとか言われた時は。まぁあたし達を命令通り動かそうなんてちょっと考えが甘いんだけどね。」
「でもアリサちゃんもすずかちゃんも良く親が許可してくれたね。どうやったのかな？アリサちゃん、すずかちゃん。」
「それぞれのデバイスに格納されているジュエルシードを見せたらあっという間に決まっちゃったわよなのは。もちろんシャークがあたしを守ってくれる事前提だけどね。」
「私もアイリが私を守ってくれる事が前提条件だけどね勿論。それでもやっぱりこの事件を無視する事なんて出来ない。だから一緒に頑張ろうなのはちゃん、アリサちゃん。」
そして夜は静かに更けていく

# それは火の鳥、強大な竜種なの

ＳＩＤＥフェイト

「よしっ何日かかっちまったけど引っ越し完了だぜ。さぁフェイト、アルフ探しに行こうぜジュエルシード。管理局だって探してるはずだしな。」

「うん由生。管理局チームには負けられないよねやっぱり。」

「さぁ行こうよフェイト、由生。管理局だって動いてるんだ早くしないと管理局に奪われちまうよジュエルシードを。もうフェイトのあんな姿はあたしは見たくないよ。」

その頃アースラでは

ＳＩＤＥなのは

「由生君達もジュエルシードを探してるはずだし、負けられないよね。今日は私とアリサちゃんで出撃ですずかちゃんはアースラで待機だし３人揃って出撃はあんまりなさそうだね。まぁ命令拒否権はいざという時まで使わない方が良いよね。じゃあすずかちゃん行ってくるね。」

「気を付けてねなのはちゃん、アリサちゃん。私も出撃できればもっと楽かもしれなかったんだけど。相手は火の鳥みたいな竜種なんだし。」

「属性的にあたしはあんまりダメージ期待できないのよねぇ～今回。でも出撃になったからにはやるだけやってやるわ。竜種が何だってのよ火属性だからってなめんじゃないわよ。」

「ユーノ兄さん、シャーク兄さんお２人をどうかお願いしますね。皆が怪我しないで帰ってきますように。」

「アイリは心配性だな。あれくらい俺とユーノのサポートがあればなんとかなるっての。」

「大丈夫なのはとアリサは僕達が必ず守ってみせるよアイリ、だからそんなに心配そうな顔しないで。僕達だってただのサポート魔導士じゃないんだから。」

「行こうユーノ君、シャークさん、アリサちゃん。今はジュエルシー

ドを封印する事が先決、見つかったのが由生君達に奪われる前に回収しちゃおう。」
「由生達もジュエルシードを集めてるんですものね。負けてられないわ。未だに3個しかこっちは回収できてないし。さぁちゃっちゃと回収するわよシャーク。」
「燃えているなアリサ。だがその燃え方嫌いじゃないぞ。その域だアリサ、次こそ負けないという気持ちも大事だぞ。」
「暑苦しいよシャーク。もっと暑苦しくない言い方出来ないの？シャーク。」
「そんな事言ってもよユーノ兄さん、これが俺の普通の喋り方だしな。」
「皆お喋りはそこまで、そろそろ転移が終わるし戦闘空域だよ。」
そして転移が終わり
「大きいこれが竜種いったいどれだけ大きいの？ってこれって確かリオレウスだったはず。なんて大きさなのこんな大きさが暴れ始めたら・・・・・・。」
「ちゃっちゃと封印するしかないわね。こいつの炎ブレスには要注意だけどねなのは。」
「グオオオ

「きゃぁぁぁ

「フラッシュ・ムーヴ。」
「フレイム・シューター。」
「フレイム・ブラスト。」
「グォォォ

「しかしリオレウスったかあんなに火力ある連中で向こうは特訓してるのか？こりゃあ俺達も特訓した方が良いんじゃねぇか？ああいうので。」
「正直特訓した方が良いんでしょうねああいうので。回避の練習にはもってこいだわアレ。」
「なのは達もあれでアイテム持ち込んだりした方が良い気がするなの。いつまでも由生君には頼っていられないなの。」
そして時間が過ぎアースラに回収された後
「なのはちゃん達良く倒せたねアレを。正直もう駄目かと思っちゃった。アイリもユーノ君と一緒に回復お願いね皆の。」
「任せてくださいすずか。しかし、皆さんお疲れさまでした。フィジカルヒール。」
「あ、傷が治っていくありがとうございますアイリさん。しかし、この火傷の後だけはどうしようもありませんね回復魔法でも。」
「火傷したって事はごまかせるけど火傷の後だけはどうしようもございませんわね私にもこればかりはお医者様に見て貰わないと。」
「君達良くやってくれた。リオレウスとか言ったか？あれのサイズを見た時は正直絶望したよ僕は、あんな大きなのがジュエルシードの異相体なんて思ってなかった。あれはいったい？。」
「あれは私達の世界でも大人気なゲームモンスター○ンターってやつに出てくる大型モンスターなんです。あれほどのサイズになると金冠サイズでしょうけどね。」
「金冠？良く分からんが最大サイズって事で良いのかい？それは。」
「はいそれであってます。しかし最大サイズが出てくるとは思わなかったなの。」
「ジュエルシードもこれで４個目だし残りは青が１２個赤が３個で間違いないね。」
「半分はすぎたけど、それでもまだ青が１０個以上か～ばら撒かれてるな。」
「まぁそれでもやるしかないでしょ。残り１２個探すしかないわね。」

「まだ青が１０個以上あるのか？これで。エイミィ残りのジュエルシードのサーチ素早く頼むぞ。」
そして次なる舞台へ突き進む

# 寒空の中の決闘なの

ＳＩＤＥフェイト

「なのは達がどうやら１つジュエルシードを封印したようだフェイト、アルフ。なお異相体はリオレウスだった模様。」

「流石にそこに入り込んで奪うなんて真似は出来ないね由生。しかし、リオレウスとはブレスがかなりブレスの威力が高いからね、なのは達良く生きてたねあの高威力のブレスに空中からの毒爪攻撃で体力はかなり削られるからね。リオレウス相手に良く生き残れたなぁ～本当に。」

「こういう時の事を考えてユーノには回復薬グレートと解毒薬だけは渡しておいたからな俺が。それでも結構消耗は避けられないと思うけどな。解毒薬だけは１個しか渡さなかったから２回以上毒にされたらアウトだけどな。回復薬グレートも１０個だけだしな渡したのは。」

「それでも生き残れるとは正直思ってなかったの私は。こっちもリオレウス系統出てきたら危ないけどね。」

「そろそろ反応地域だお喋りはここまでだな行くぞフェイト、アルフ。って妙に寒くないか？この辺り。」

「そう言えば・・・・・あの赤いのってテオ・テスカトル？だとしたら寒いじゃなくて熱いだし・・・・・・まさかあの赤いのって。」

「間違いないな。赤いジュエルシードの異相体の１つだな多分身体が赤いトア・テスカトラだなあれは間違いなく。そしてあと２体異相体がいてもう１体も赤いジュエルシードだなってもう１体の赤い異相体はラージャンか。もう１体は青いジュエルシードの異相体だな。」

「青いジュエルシードの異相体はリオレイア亜種か。今回は結構苦戦しそうだね。管理局側も呼ぶ？由生。」

「管理局ではこの３体は相手出来ねぇよ。俺とフェイトとアルフでやるしかないな。ラージャンは俺が、フェイトはトア・テスカトラを、アルフはリオレイア亜種を頼む。それぞれ弱点はつけるはずだから

これにしたがどれか1体封印したら回収してから応援に行くって事で。」
「了解由生。」
「じゃあ封印を始めようか散開。」
「散開の前に由生のボルグレインに1回だけの封印魔法を込めておくよ最後に使ってねスラッシュに込めておくから。」
「すまねぇなフェイト。今度こそ散開して片付けるぞ皆。」
ＳＩＤＥ由生
「さぁやろうかラージャン。」

「ガオオオ

ウォォォ

「グオオオ

「ガァァァ

「ギャオオオ

はこの分だと由生が言う通り海かな?。しかし、ちょっとばかり疲れたね今回は。はい由生回復薬グレート３０本ね。」
「すまねぇなフェイト。少し休んだら次のジュエルシード求めていくか。」
「うんそうだね由生。」
そして時間は過ぎていく

ジュエルシード氷山の一角そして飛竜種の登場なの

ＳＩＤＥフェイト

「そろそろ休憩も十分したし次に行かないか？それと回復薬グレートありがとうなフェイト。」

「ううん由生こっちこそ協力してくれてありがとうね。由生のおかげでだいぶ助かってるよ私もアルフも。」

「フェイトがこんなに笑うようになったのも由生のおかげだしね。ああそうだ由生転送魔法覚える気ないかい？今後は転送魔法があった方が便利だしね。」

「すまねぇなアルフ。じゃあ行く前に転送魔法だけ覚えていくか術式だけでも教えてくれここでな。」

「そういう事なら私も教える側に回るね由生。私とアルフで教えた方が速いから。」

「じゃあすまんがよろしく頼むぜフェイト先生、アルフ先生。」

その頃アースラでは

ＳＩＤＥなのは

「ジュエルシードの反応２個見っけ近くにフェイトちゃん達はいないし、取るなら今の内だね。ただ寒い場所にはなるけどね何しろ場所が関東だけど群馬県の赤城山って場所みたいだから。」

「海鳴市からだいぶ遠い場所ですねそうなると。それで今日は誰が居残りですか？エイミィさん。」

「今日は寒い場所になるし３人揃って出撃した方が良いと思うんだけどどうかな？クロノ君。」

「今日ばかりは３人揃って出撃の方が良いだろうな。山の中で遭難でもされたら厄介だし・・・・・・。僕も念の為に出よう今日は。」

「ありがとうクロノ君。これで思いっきりやれるなの。頑張ろうねアリサちゃん、すずかちゃん。」

「もちろんよなのは、どんな異相体が来たってあたしが戦陣を切るわ。先鋒はあたしって決まってるしね。」

「私はアースラに来てから初めての出撃だからアリサちゃん程やる

気にはなれないけど、それでも私も頑張るねなのはちゃん。」
「女の子を守るのは男の役目だ、そこのフェレットもどきと犬もどきもそれぞれ頑張るようにな。」
「「誰がフェレット（犬）もどきだこの野郎。僕（俺）にはユーノ（シャーク）って立派な名前があるんだ（よ）。」」
「大丈夫だ場を和ます軽いジョークだ。これで緊張も解けただろ。さぁ早速出撃するぞ皆で。」
「じゃあ気を付けてねなのはちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん、アイリちゃん。女の子にはちょっと寒すぎるかもしれないけど我慢してね。」
「さて、ジュエルシードの異相体は今日はなんだ？この前みたいなリオレウスって奴じゃないと良いんだが・・・・・・。」
「あれってベリオロスにティガレックス？よりにもよってあの２頭だなんて・・・・・、かなり強いよあの２頭は。」
「じゃあまずはティガレックスってのから片付けようかアリサちゃん、すずかちゃん、クロノ君。咆哮にさえ気を付ければそんなに火力はないだろうしあとは岩飛ばしてくるからねティガレックスは。」
「フレイム・シューター。」
「グオオオ

「ディバイン・シューター。」
「フレイム・シューター。」
「アイス・シューター。」
「スティンガー・スナイプ。」
「グォォォ

「ガァァァ

ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア。」
「ブ　レ　ス！　し　か　も　横　薙　ぎ　の。
きゃぁぁぁ

ロノ君。まだ出てきてないけど出てこられたら共闘しても勝つのは難しいと思う。」
「クロノ君、なのはちゃん、アリサちゃん、すずかちゃんそろそろ回収するねアースラに。あとは自室でゆっくり休んでね。」
「すまないエイミィ今回ばかりは疲れたよ僕は。早めに回収してくれると助かる。」
そしてアースラに回収され時間はすぎていく

# 死闘海鳴市、火山での激闘なの

ＳＩＤＥフェイト

「転移魔法習得まで付き合ってくれてありがとうなフェイト、アルフ。さて、ジュエルシードの反応が出た、どうやら火山の中にあるらしい厄介な事になったなフェイト、アルフ。」

「火山の中か～そいつはちと厄介だねぇ～いつ噴火するか分からないし噴火する前に回収できれば良いんだけどねぇ～。」

「由生が氷属性の魔法使えるけど、噴火した溶岩を凍らせられるって保証はないしちょっと厄介だねやっぱり。由生が凍らせられるならそんなに厄介じゃないんだけど。」

「流石に溶岩を凍らせるってのはキツイね俺も、まぁ異相体次第なんだけどな溶岩で戦うかどうかは、できればヴォルガノスやアグナコトルじゃなければいいんだが・・・・・・。」

「由生それフラグでしょ?そんな事言ってると本当にそうなっちゃうよ!フラグ建てないでくれるかな?由生。」

「そろそろ火山が見えてくるな。穴の中にいるのは・・・・・・ゲッ!まじかよフラグ回収すまんフェイト、アルフ。」

「あ～あやっぱりフラグ回収だったよね由生。嫌な予感はしたんだよねぇ～私。溶岩ある場所で異相体がこいつらじゃないって事ないと思ってたもん。」

「まぁ出てきちまったもんは仕方ないよフェイト。こいつら2頭を早く倒してしまえばいいのさ。」

「そうだねアルフ、両方とも弱点は水か氷だし由生の魔法があれば早く倒せるよね。」

「まぁ他の氷属性吸収出来ればもっと速くなるんだが・・・・・・あいにく火山に他の氷なんてある訳ないよな・・・・・・・トホホ。」

「行くぞ!フェイト、アルフまずは色違いのアグナコトルからだ。フリーズ・バスター。」

「フォトン・ランサー。」

「フォトン・スマッシャー。」

「グオオオ

グァァァ

～こいつ。バリア・ブレイク。」
「フリーズ・エンド。」
「サンダー・レイジ。」
「グオオオ

「海の場合は水が異相体になるだろうから色々とやりにくそうだねぇ～やっぱり。水のモンスターって何がいたっけ？フェイト、由生。」
「海のモンスターといったら俺が真っ先に思いつくのはザボアザギルとあとはラギアクルスとかダイミョウザザミ等だな。どれが来ても厄介にはなるが。」
「サーチャー結果が来たよ由生。やっぱり残り7個のジュエルシードは海にあるのは間違いないね由生。」
「やっぱり海か。こうなったら半分ずつに分けて俺とフェイトで魔力撃ち込むしかないね。半分なら魔力切れにはならないからさお互いに。」
「あたしも魔力撃ち込むからねフェイト、由生。そうすれば魔力は結構残るから戦いやすいはず。3人でも頑張ろうねフェイト、由生。あたしとフェイトでサンダー・レイジを由生のフリーズ・バスターで何とか発動は出来るはずさ。」
「その後は残った魔力で一気に封印出来れば最高だなフェイト、アルフ。まぁおそらく管理局も海に来るだろうから管理局と共闘になりそうだけどなそれがなのは達なら尚更都合が良いけどな俺らにとっては。」
「あの娘達か～あの3人のおチビちゃん達は役に立つのかい？由生。」
「あの3人はああ見えても管理局が欲しがるほどの魔力総量だぜ？役に立たないって事はないだろうな俺と比べたらだが・・・・・？。」
「なのは達か～名前だけは知ってるけど氷と炎と無属性だったっけ？由生。」
「ああその通りだぜフェイト。あの3人の属性はそれであってる。まぁ3人の内アリサが炎だから水のある場所じゃだいたい役立たずかもしれないけどな。」
「あ～確かに水のある場所で炎っていうと色々と大変だし役に立たないかも・・・・・。」
「水のある場所で炎は相性最悪だねぇ～確かに。まぁアリサっての

には大人しくしてもらうしかないね。」

そして舞台は海へと続く

# 最終決戦海の上での共闘なの

ＳＩＤＥなのは

「私達が手に入れたジュエルシードは３個、フェイトちゃん達が手に入れたジュエルシードは推定５個残りのジュエルシードは７個。」

「残り７つのジュエルシード見つからないわね。」

「捜索範囲を海の方にまで広げています艦長。暫く待てば反応が出てくるかと。」

「しかし、あたし達の出撃もここんところないし暇よねぇ～なのは。フェイト達の動きも管理局のサーチャー潜り抜けて５個回収してるみたいだし、どうにも数が足りないわよねぇ～こっちのジュエルシードが。あたし達が持ってるジュエルシードってなのは、あたし、すずか合わせても６個くらいだもんねぇ～。」

「私達がここまで集められなかったのも訓練の差だし仕方ないよアリサちゃん。なのはちゃんしか封印出来ないのもこっちとしては厳しい状況だしね。フェイトちゃん側もフェイトちゃんしか封印出来ないしどっちもこればかりはどうしようもないよねぇ～。」

「なのはももう少し強くなれたらフェイトちゃん達にこれほど奪われてる状況にはなってないなの。なのはの力不足のせいでごめんねアリサちゃん、すずかちゃん。」

「ごめんは言いっこなしよなのは、あたしももう少し強ければ・・・・・なのはの手伝いがもう少し出来たはずなんだけど・・・・・。」

「ごめんは言いっこなしだよなのはちゃん。私ももう少し強ければ・・・・・なのはちゃんの手伝いがもっと出来たはずなのに・・・・・。」

「ジュエルシードはやっぱり海なのかな～？こうなってくると。」

ビー、ビー、ビー。

「いったい何なのよこの警報は。」

「とりあえずブリッジに行ってみようアリサちゃん、すずかちゃん。」

「リンディさんこの警報はいったい何が？ってフェイトちゃん達まさか・・・・・・。」

「なんとも無茶な事する娘達ねぇ～彼女達もまぁこのまま魔力が尽きたところを捕縛するとしましょう。」
「でもそれじゃあフェイトちゃん達は。このままじゃ・・・・・・・。」
「待て君達何処へ行くつもりだ？まさかとは思うが・・・・・・・。」
「このままじゃフェイトちゃん達が。」
【なのは行って。僕がゲートを開くからこのまま3人はフェイト達の元へ】
【ユーノ君良いの？このままじゃユーノ君が。】
【僕は大丈夫だから行ってなのは、アリサ、すずか。」
「私達はこのまま見ているなんて事出来ないのでここで命令拒否権を行使させていただきます行こうアリサちゃん、なのはちゃん。」
「待て君達は・・・・・・。」
「高町　なのは。」
「アリサ・バニングス。」
「月村　すずか。」
「「命令拒否権により勝手な行動を取らせていただきます。」」
その頃海では
ＳＩＤＥフェイト
「ハァハァハァやっぱり3人で力を合わせて魔力撃ち込んでみたけどジュエルシード7個の同時発動は思ったよりも魔力を持ってかれたね由生、アルフ。」
「ハァハァハァ結構魔力持ってかれたなこれはキツイ。魔力がもう殆ど残ってねぇや俺。ジュエルシードの異相体は今回は7個同時発動の為に7個のジュエルシードが1つになってしまったか。」
「これはまずいね。7個のジュエルシードが1つになっちゃったか。で由生あの異相体は？見たことないモンスターなんだけど・・・・・・。」
「あれは、まさかそんな馬鹿な。あれは間違いないネロ・ミェールじゃないか。なんだってネロ・ミェールに。」
「由生ネロ・ミェールって何？。」
「あれは最近の作品で出てきた水の古龍なんだフェイト。水の攻撃

がメインなんだが、雷を纏った攻撃もしてくるんだあいつはなフェイト。」
「あれを封印するには魔力が足りない。でもやるしかないね由生、フェイト。魔力を受ける状況になれば良いんだが。」
「ディバイン・バスター。」
「フレイム・シューター。」
「アイス・バスター。」
「グオオオ

「グォオオオ

「サイズ・スラッシュ。」
「フォトン・ランサー。」
「フレイム・ランス。」
「フリーズ・バスター。」
「グォオオオ

スゥゥゥ

「フォトン・ランサー。」
「ディバイン・バスター。」
「フレイム・シューター。」
「フリーズ・バスター。」
「グォォォ

ＳＩＤＥプレシア
「ジュエルシードは全部揃った。あとはフェイトが逃げる時間を稼ぐだけ。サンダー・レイジＯＤＪ。ゴホッ！ゴホッ！ガハッ！もう時間は残されてないわね。」
ＳＩＤＥフェイト
「アースラに高次元魔力来ます。」
「ディストーションシールド展開。」

「きゃぁぁぁ